

県道日置～南高鍋線道路改良事業にともなう
埋蔵文化財調査報告書

MIZU YA BARU
水 谷 原 遺 跡

1988. 3

宮崎県教育委員会

序

このたび、宮崎県教育委員会では県道改良事業に伴う高鍋町水谷原遺跡の発掘調査報告書を刊行することになりました。

本遺跡は、国指定史跡持田古墳群が位置する台地の小丸川を挟む対岸に立地します。調査では、縄文時代早期の集石造構をはじめとして、同時代の土器・石器、弥生時代の土器が出土し、当地域の歴史の一端を窺い知ることができます。

この報告書が、文化財保護や愛護思想の普及、教育・研究の資料として活用されることを願うとともに、我が郷土にたいする歴史的関心と知識が深まることを期待いたします。

なお、調査にあたっては高鍋町の地元の方々をはじめとして、宮崎県高鍋土木事務所、その他多方面にわたって多くの人々のご協力をいただきました。

心より御礼を申し上げ、刊行の言葉といたします。

昭和63年3月

宮崎県教育委員会

教育長 船木哲

例　　言

1. 本報告書は県道日置～南高鍋線建設工事に伴って宮崎県教育委員会が実施した水谷原(みずやばる)遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、昭和61年7月10日から昭和61年10月15日に至る期間実施した。
3. 調査関係者は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

教　育　長　船　木　哲

文　化　課　長　永　井　初　志

同　課　長　補　佐　梨　岡　孝

埋　文　係　長　田　中　茂(昭和61年度)

丸　日　恵　教(昭和62年度)

庶　務　係　長　日　高　達　男

4. 発掘調査は、近藤　協(宮崎県文化課主任主事)が担当した。

5. 本報告書では、集石遺構について、SIの略記号を用いている。

6. 遺物の実測・トレース・図面の作製は近藤がおこなったが、一部については金丸琴路、野田和美の援助を得ている。

7. 本書の執筆・編集にかかる作業は近藤がおこなった。

8. 出土遺物は宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターに保管されている。

本 文 目 次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡周辺の歴史的環境と地理的環境	1
第3節 調査の概要	4
第4節 層 序	5
第2章 遺構と遺物	7
第1節 赤ホヤ層上面の遺構	7
1. 溝状遺構	7
2. 柱穴列	9
3. 土 壤	11
第2節 遺 物	11
1. 弥生土器	11
2. その他の遺物	14
第3節 遺 構 (IV層上面)	15
1. 1号集石遺構～6号集石遺構	15
2. 4号・5号土壤	20
第4節 遺 物	21
1. 繩文土器	21
2. 石 器	31
第3章 ま と め	37

挿 図 目 次

第1図 水谷原遺跡位置図	2
第2図 水谷原遺跡周辺図	3
第3図 水谷原遺跡土層模式図	5
第4図 発掘区西端・東壁土層断面図（南→北）	6
第5図 B-2区西壁土層断面図	6
第6図 凹線文ミニチュア高环実測図	7
第7図 柱穴列実測図	7
第8図 赤ホヤ上面層検出遺構図	8
第9図 赤ホヤ層下IV層検出遺構配置図	8
第10図 発掘区南壁溝付近土層断面図	9
第11図 溝状遺構実測図	9
第12図 土壙（1号・2号・3号）実測図	10
第13図 弥生土器実測図	13
第14図 石錘・土錘・环実測図	15
第15図 1号集石遺構実測図	16
第16図 2号・3号集石遺構実測図	17
第17図 4号集石遺構実測図	18
第18図 5号集石遺構実測図	19
第19図 6号集石遺構実測図	19
第20図 4・5号土壙実測図	20
第21図 縄文土器実測図（1）	21
第22図 縄文土器実測図（2）	22

第23図 縄文土器実測図 (3)	23
第24図 縄文土器実測図 (4)	24
第25図 縄文土器実測図 (5)	25
第26図 6号集石遺構付近遺物分布図	31
第27図 打製石鎌実測図	32
第28図 石器実測図 (1)	33
第29図 石器実測図 (2)	34

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

宮崎県高鍋土木事務所管内では、昭和58年度より6年計画で、日置—南高鍋線間に所在する水谷原地区の特殊改良工事をおこなっている。計画路線は標高約50mの台地から、高鍋町の町並となっている沖積地に、大きく湾曲しながら下るもので、現在の幅員の狭い、曲がりくねった路線を改良しようとするものである。

昭和61年度事業予定工区内においては、遺跡の所在が懸念されたので、昭和61年4月宮崎県文化課に依頼して、遺跡の確認調査がおこなわれた。確認調査は同年4月宮崎県文化課主任主事面高哲郎が、同土木事務所道路建設係と同行のうえ地形の確認および遺物の表採をおこなった。その結果をうけて宮崎県文化課では高鍋土木事務所からの調査の依頼をうけ、同年7月10日から10月15日の間本調査を実施した。

第2節 遺跡周辺の歴史的環境と地理的環境

高鍋町は、南北に細長い海岸線を有する宮崎県のはば中央、口向灘に面した海岸部に位置している。市街地は口向灘にそそぐ小丸川の沖積地に営まれており、北部の川南町と接する地域と、南～南西部の新富町に接した地域はそれぞれ標高約50～70mの洪積世台地となっている。

小丸川の沖積地においては、詳細な遺跡の分布調査がおこなわれていない現在、有力な遺跡の位置はおさえられていない。今までに知られている遺跡のはほとんどは、先の台地上に分布している。もっとも古い文化の足跡をのこす南高鍋地域の台地上では、これまでに、個人の表面採集によって数点の旧石器が知られているが、正確な地点は明らかではない。^{註1}

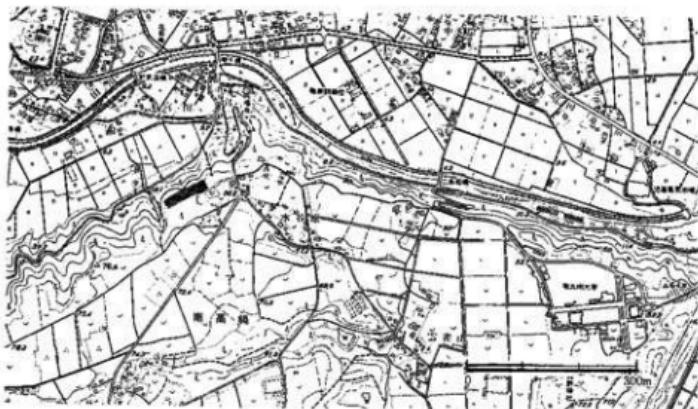
それらは、主に新山、雲雀山地区等で表採されている。発掘調査によって得られた旧石器には、持田中尾遺跡出土の円形搔器・三鏡尖頭器や上永谷地区にある賽道南遺跡出土のナイフ形石器・敲打器がある。当台地は県内でも有力な旧石器時代遺跡の包蔵地である。^{註2} ^{註3}

台地上を歩くと、耕地や切通の層位中に焼礫の散布をよくみかけるが、縄文早期にあたる集石遺構を有する遺跡はこの台地一帯に濃密に分布しているものと想定される。水谷原遺跡近辺では、先の賽道南遺跡の他、毛作地区に焼礫の大散乱地がある。

同じ縄文早期にあたる縄文土器で、ほぼ全形を知りうるものは、耳截地区において出土した手向山式土器がよく知られている。しかし、縄文前～後期にあたる遺物の出土は僅少であり今までのところ有力な遺跡の地点はおさえられていない。^{註4}



第1図 水谷原遺跡位置図



第2図 水谷原遺跡周辺図（スクリーントーンが水谷原遺跡発掘区）

弥生時代の遺跡もまた、台地上、あるいは沖積地を眺む低丘陵上に散在し、青木、牛牧、山王、持田等が知られるが、特記されるのは、弥生前期～中期に比定される持田中尾遺跡で^{註5}多量の刻目突帯文土器や大陸系磨製石器が発掘されている重要な遺跡である。

古墳時代は、小丸川左岸の標高30～50mの狭い丘陵上に前方後円墳、円墳あわせて85基余りが濃密に営まれている国指定史跡持田古墳群によって代表されるが、その他にも、小丸川右岸には、山王、雲雀山、毛作、上永谷、水谷原他に立地する県指定高鍋町古墳がある。また下水谷地区の国道10号線に面した海岸段丘の海蝕崖にはシルト質の第3紀層に穿たれた横穴式古墳3基がある。

水谷原地区の北部に立地する本遺跡は、台地の北端縁部にあり、北側はすぐに深い谷を刻み急崖となって沖積地へと落ち込んでいる。遺跡の立地する平担地は、南から斜面のせまる比較的狭隘な平担地で、この台地の平均的な標高より約10m低くなってしまっており、原地形は南から北に緩かに傾斜している。台地縁辺部は細かく開析されて、湧水点は小谷を刻むが、当遺跡から最寄の湧水地は北に約200mの地点にある。

註1 茂山 譲・大野寅夫 「児湯郡下の旧石器」『宮崎考古3』昭和52年

註2 北郷泰道 「持田中尾遺跡」高鍋町教育委員会 1982.3

註3 近藤 協 「妻道南遺跡」 高鍋町教育委員会 1986.3

註4 茂山 譲 「宮崎考古2」昭和51年

註5 註2と同じ

註6 梅原末治 「持田古墳群」 宮崎県教育委員会 昭和44年

第3節 調査の概要

調査区は、道路予定区の平坦面、すなわち東西に長く道路幅で設定しているが、のり面となる南側の斜面、および、より上面の平坦面の一部にもトレンチを設定して遺構の検出を図った。主要な調査区となった平坦面は、南北16m×東西76mを測り、東端一部が畠地、荒地となっていた他は一面竹林となっていた。この竹林の伐採に約6日間を費し、その後土層確認のための試掘溝をあけながら重機を投入して表土を全面にわたって剝いでいる。表土は竹根がかなり深く侵入しており、不本意ながらやや深めに剝がざるを得なかった。

斜面に設けた、2.5m×20mのトレンチ、および上部の12m×3.5m、2.0m×1.5m、1.0m×10mのトレンチでは表土下がいずれも地山疊層となっており、拳大から人頭大の砂岩、尾鈎酸性岩類で占められ、遺物の出土もなく遺構はないものと判断されたので調査区外とした。

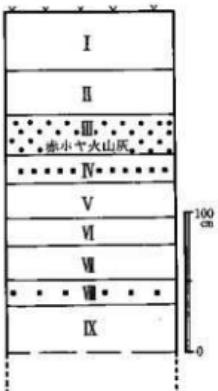
主要調査区の赤ホヤ上面で検出された遺構には、溝状遺構、土壤、柱穴列（樋か）があるが黒色土層から出土した弥生土器にともなうと考えられる遺構はとらえられていない。

赤ホヤ直下層では、すでに東端の切通断面において焼けた角礫が確認されていたので、縄文早期の集石遺構の検出が予想されており、赤ホヤ上面精査後、赤ホヤ直下面で全面にわたって剝ぐこととした。

発掘部中央部の南側、すなわち斜面が平坦部に接してゆるく傾斜しているところ、8m×25mの範囲では、斜面を形成したと同じ人頭大の丸礫が赤ホヤ層にうまつた状態で検出されているが、礫中に遺物を含まず入為的な意図は感じられない。

赤ホヤ層直下で検出された遺構には、集石遺構、土壤がある。集石遺構は合計6基あり、いずれもまさに赤ホヤ直下からの検出である。集石遺構周辺における破砕礫の散布状態は全般に散漫、疎な状態であった。土層の項で述べたように縄文早期層より下層に、小さな焼けた角礫を数個確認していたので、旧石器遺構・遺物の調査を意図して、発掘区東側に、4つのグリッド、約150m²を設けて精査したが遺物は出土していない。

第4節 層序



第3図 水谷原遺跡土層模式図
(角点は焼礫をしめす)

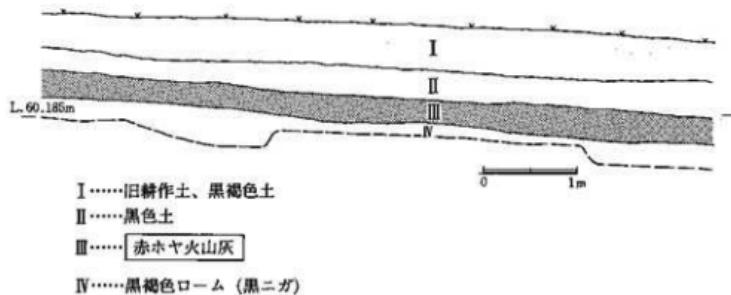
第3図の模式図で示した土層は発掘区東端崖で確認したものであり、各層の厚薄はあるものの基本的には全発掘区とも同一と考えてよい。赤ホヤ火山灰の残存状態は良好であり、20cm～30cmの厚さで堆積していた。第二オレンジ（A T）は躍層においてその火山灰粒と思われる小粒をみる程度であって一層を形成するに至っていない。おそらく本調査区が、台地終端部に位置して、緩傾斜地となっているため、流出してしまったものと推定された。

I層……………旧耕作土である。黒褐色層で、適度の粘性がある。
約40cmの厚さである。

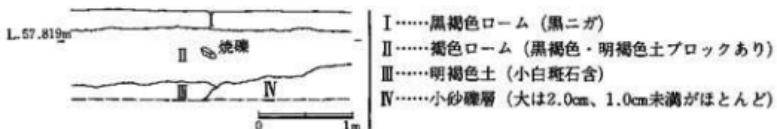
- II層……………I層より黒味を帯びた漆黒の土層である。やや粘性があつて、しまっている。
- III層と接するII層下部が弥生土器の包含層となっている。約30cmの厚さがある。
- III層……………赤ホヤ火山灰層である。所によってはやや風化がみられ、赤褐色を呈する部分がある。
- IV層……………黒褐色土層（Hue10YR 3/1）極めて堅くしまっており、石英小粒を含んでいる。いわゆる、黒ニガ土とよばれるもので、粘性にとぼしく乾燥すると縦横に割れてボロボロ落ちる。このIV層が集石遺構および焼礫を包含する。
約20cmの厚さがある。
- V層……………褐色土層（Hue10YR 3/3）極めて粒度細かく、粘性の強い土層である。IV層との層界は明瞭である。約30cmの厚さがある。
- VI層……………褐色土層（Hue10YR 3/4）V層とほぼ同じ色調、粘性をもつが、黒褐色の極めてかたい不定形のブロックを含むことでV層と分別される。約20cmの厚さがある。
- VII層……………褐色土層（Hue10YR 4/6）V層に比べてやや暗い色調を帯び、粘性も大となる。

- Ⅶ層………明褐色土層 (Hue10YR 5/6) 粒度が大きく、ときに8mmの大黄褐色大粒石を含み、ザラザラしている。第二オレンジとおもわれる黄色の軽石小粒 (黄橙 Hue10YR 8/8) を含んでいる。約20cmの厚さがあり、時に焼礫を含んでいる。
- Ⅸ層………明黄褐土層 (Hue10YR 7/6) 粒度、極めて細かく粘性大である。

以上、Ⅲ、Ⅳ層が遺物包含層である。Ⅴ層から幼児の拳大の焼礫が3点出土しているが、それ以外に人為的遺物をみていよい。



第4図 発掘区西端、東壁土層断面図（南→北）(1/60)



第5図 B-2区 西壁土層断面図 (1/60)

第2章 遺構と遺物

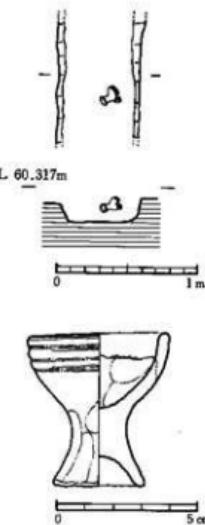
第1節 赤ホヤ層上面の遺構

赤ホヤ火山灰層（Ⅲ層）上層面において検出した遺構には、溝状遺構、柱穴列、土壙がある。

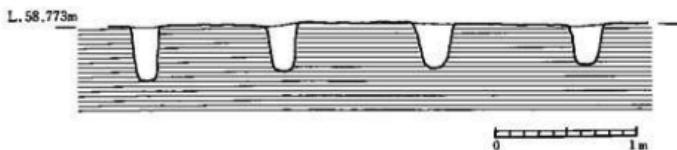
1. 溝状遺構（8, 10, 11図）

溝状遺構1はH-2区、発掘区の西端北壁から東へ26m伸びたところで、ほぼ直角に北へ向きをかえて、発掘区北端（E-1, F-1区の接する地点）に至る。全長約38mの溝である。60～90cmの幅をもちながら、深さは検出面（赤ホヤ上層）から24cm～55cmを測り、断面はU字形からL字形を呈す。

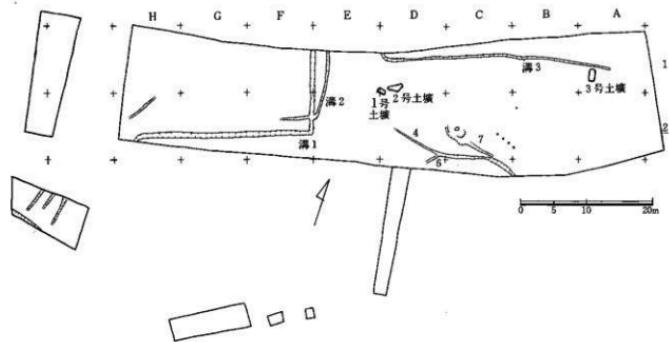
溝状遺構1の出発点（H-2区）から終点（E-1, F-1区の接する地点）までの溝底でのレベル差は約111.5cmあって南から北へ徐々に下がっている。溝2はF-2区の中ほどから検出され、溝1とF-2、E-2区の接するあたりで合流して北へ向きを変え、徐々に溝1に平行してゆく。さらに西に継続していたものと考えられるが、溝底が赤ホヤ面までおよんでいなかったために、表土剥ぎの際削平してしまったものと考えられる。検出できた全長は約15.5m、幅30～45cmをはかり、レベル差は約48cmある。溝1、溝2の新旧関係を合流点でみれば同時期の掘削であった。溝1、2とも黒褐色の粘性がほとんどなく、しまりのない土壤を埋土とし、陶磁器



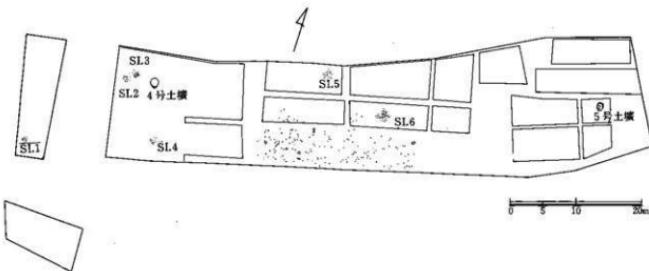
第6図 凹線文ミニチュア土器
高坏実測図（上）



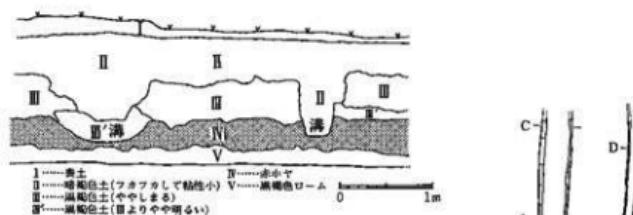
第7図 柱穴列実測図（1/40）



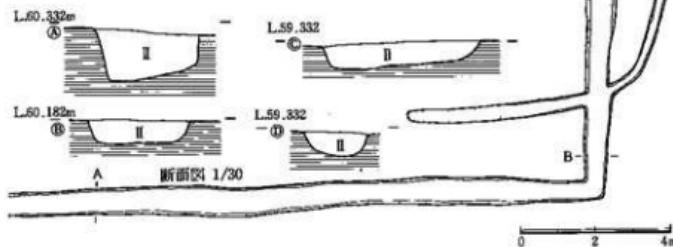
第8図 赤ホヤ上面層検出遺構図 (1/600)



第9図 赤ホヤ層下層検出遺構配置図 (集石遺構・土壙) 1/600
(黒点は人頭大の転窓)



第10図 発掘区南壁溝付近土層断面図 (1/60)



第11図 溝状造構実測図 (1/150)

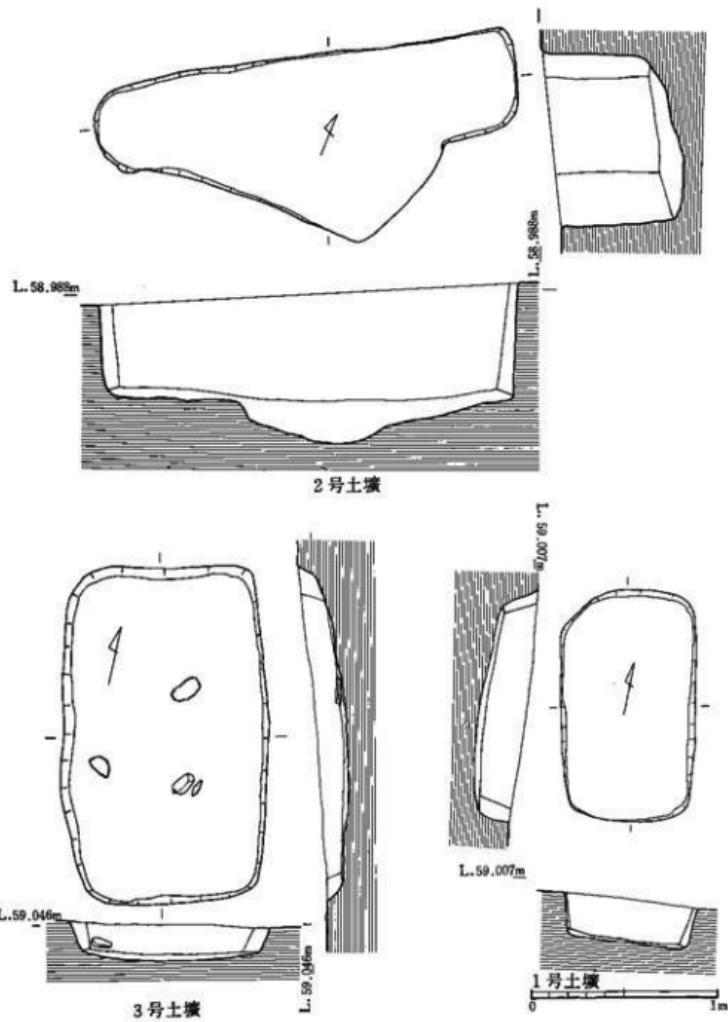
の破碎片数点を含んでいた。溝状造構 3 は D-1 区の南壁に端を発して東へ約 35m 延びて、A-1 区で終焉する幅 30cm~40cm を測る溝である。西端と東端とのレベル差は約 74cm あって、東側が低くなっている。

A-1 区にあたる溝状造構 3 東端において、擬凹線を口縁部に施したミニチュア高杯 (6 図) が溝中より出土している。

溝状造構 4 は D-2 区から C-3 区へ約 20m 延びて、レベル差は約 25.8cm とゆるく東へ低くなってしまっており、D-3 区で別の溝 6 が分岐している。溝状造構 7 は C-2 区より検出されて、約 9 m 南東方向に延びて、レベル差約 10cm を測る。

2. 柱穴列 (7 図)

溝状造構 3 にはほぼ平行して C-2 区で検出された柱穴列造構である。4 個の柱穴が南東方向に一直線上にならぶ。P. 1 は直径 22cm、検出面 (赤ホヤ火山灰上層) からの深さ 35.4cm、



第12図 土 壤（1号・2号・3号）実測図

P.2は直径24cm、深さ31.5cm、同じくP.3は直径26cm、深さ31.0cm、P.4は直径24cm、深さ28.5cmとほぼ同規格の柱穴が、同間隔で連なるが、延長線上には全くその痕跡もみられない。柱穴の埋土は、いずれも粘性の少ない漆黒土であり、比較的しまっている。

3. 土 壤 (12図)

1号土壤

南北方向に長軸をもつ長方形の土壤で、A-1区で検出された。溝状遺構の東端近くに接している。長124cm、幅72cm、深さ25cmを測り、土壤底は西から東へ傾斜しており、レベル差は16cmになる。底に10×7cm、5×5cmほどの円礫が2点検出された。粘性の弱い、ザラザラした黒褐色土を埋土としている。基本土層のIV層（黒ニガ）に似ている。

2号土壤

D-1区で検出されたもので、3号土壤に接している。隅丸の三角形状を呈する土壤で最大長226cm、最大幅102cm、深さ55~75cmあり、検出面から直に烟られて、土壤底にいたる。埋土は、1号土壤と同じ粒の粗い黒褐色土となる。

3号土壤

D-1区で検出したもので、2号土壤に接している。長180cm、幅110cm、深さ20cmの長方形を呈するもので、土壤底、および底近くに割礫3点がみられた。粘性の弱い漆黒土を埋土としている。

第2節 遺物

1. 弥生土器 (13図)

弥生土器は擬圓錐を口縁に施したミニチュア高環(6図)を除いて、そのほかすべては遺構にともなった出土ではない。赤ホヤ直上、約10cm内外の漆黒土層(II層)中よりの出土であり、出土量は破片で約80点を数えるが、発掘面積からして極めて僅少である。出土した土器の器形は變形土器がほとんどで、他に先述の高环形のミニチュア土器がある。

1. 半完形に復元できる唯一のもので、平底の底部からゆるく内に傾きながら立ちあがって、口縁端部下で短く外反する小型の變形土器である。口唇部は浅くうしくぼんで、口縁端部外側に丁寧な刻目が巡る。器面上部は斜位のハケメ調整、下部はヘラミガキで調整される。内側上位はナデ調整であるが指印痕が一部残っている。内側下部は薄い剝離がみられる。

全体の色調は明黄褐色(10YR7/6)、胎土はきめ細かく、1.0~3.0cmの白、茶、灰色の砂粒を含む。器高16cm、口径16.1cm、底径6.4cmを測る。

2. 口縁端外側に刻目を有する口縁直下に、貼付された刻目突帯をもつ下城式甕の口縁小片で、わずかな残存である。口唇部は浅くうしくぼんでいる。胎土に1.5~2.0cmの砂粒を比較的多く含む。内外面とも淡黄褐色を呈する。

3. 刻目のない丸い壺部直下に、一条の刻目突帯を有する下城式甕である。口唇部は丸味を帯びてややだるいつくりとなる。突帯の貼付はあまいが、刻目は丁寧に施されている。

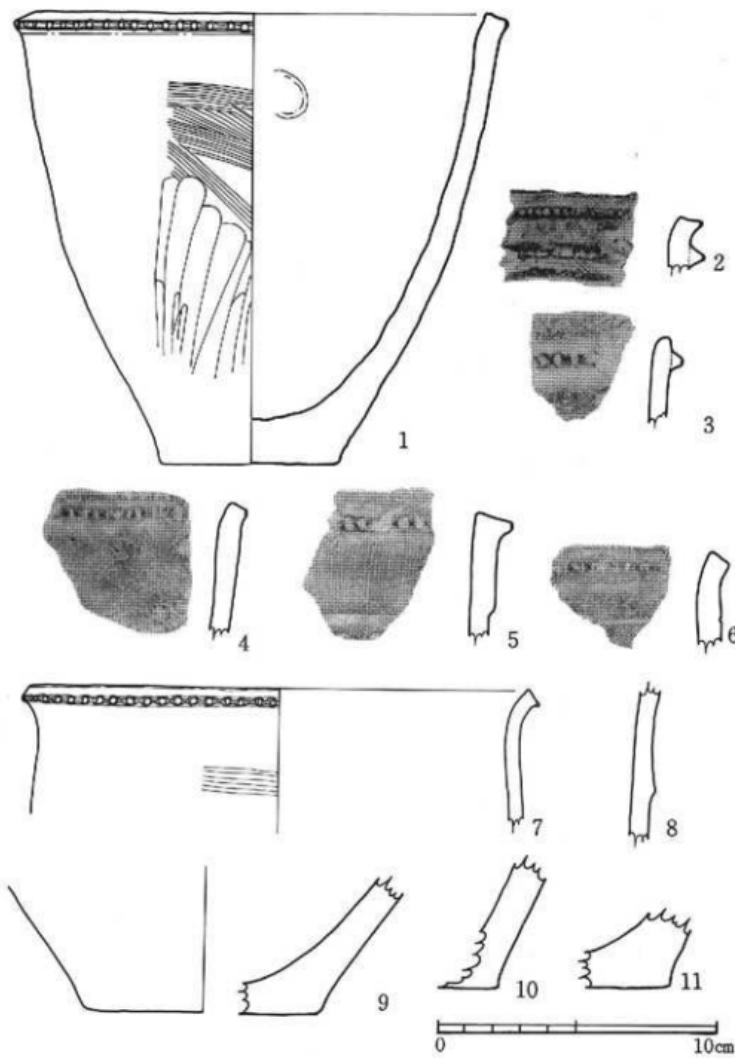
突帯直上、下ともヨコナデ調整である。胎土に1.0~2.0mmの砂粒を多く含み、内外とも淡黄色を呈す。

4. 口縁直下からごく短く外反する口縁部を有し、1.の變形土器と同形である。刻目は口縁端部外側に細密に施される。刻目直下ヨコナデ、以下細かいタテハケメ調整である。胎土に1.0mmほどの砂粒を比較的多く含み、外面淡黄褐色、内面淡橙色を呈する。

5. 口唇部外端がつまみ出されて、大きな刻目が施され、逆「L」字状にちかく成形する。口縁部下3cmまでが肥厚して以下は薄くつくられ、境目は段を形成する。刻目直下からタテハケメ調整、胎土に1.0~2.0mmの砂粒を比較的多く含む。内外面とも淡橙色を呈している。

6. これも口縁直下から外反する口縁部をもち、口縁端外側に細密に刻目を施している。4.に比較して外反が強く、口縁下部に細い沈線を巡らしている。口縁端は明瞭にうしくぼむ。調整はヨコナデと推定され、1.0mmほどの砂粒を多く含む。外面淡黄褐色、内面淡橙色を呈する。

7. 口縁部のやや下部に最大径がくるとおもわれる口径(推定)17.6cmの甕である。器厚はひじょうに薄いのがひとつの特色である。口縁は、口縁端付近で短く急反する。口縁端外側は刻目を施さんがために、つまみだされたように外につきだしている。そのつきだされた部分に刻目が丁寧にそして細密に刻まれる。端部は平坦でヨコナデ調整となる。胎土に1.0mm~1.5mmほどの砂粒を含み、器体内外面とも淡黄褐色を呈す。内外面ともヨコナデ調整である。



第13図 弥生土器実測図 (1/2)

8. 变形土器の口縁直下付近か。残存部上端から、徐々に厚くなり3.5cmのところで最大肥厚となり、そこから下へまた薄くなる。内面ナデ調整、外面上端より下1.7cmのところまでヨコナデ、そこから最大肥厚部までナデ、以下ヨコハケメ調整となる。胎土に0.5~3.0mm大の茶色の砂粒、石英粒を含む。

9. 10. 11. の3点は底部である。3点とも变形土器の平底の底部で、9.のみが反転復元により推定底径を計測できている。9.は底8.5cm（推定）、内外面ともナデ調整で、2.0~3.0mm大の砂粒を多く含み、1.0~1.5mm大の石英を含む。明黄橙色を呈している。10.は内面ヨコナデ、外面ナデ調整、胎土に茶砂粒の3.0mm大を多く含み、石英の極微粒を含む。11.は内外面ともナデ調整、3.0~4.0mm大の砂粒を多く含み、石英の極微粒を含んでいる。

ミニチュア土器（6図）

器高5.4cm、口径4.4cmを測る。瀬戸内地方の回線文高坏をまねたミニチュア土器である。口縁に3条の挺凹線を施し、全体を手捏ねで成形する。胎土に1.0mm大の砂粒を多く含む、これは、発掘区東端に位置する浅い溝3（近世）より出土している。

2. その他の遺物（14図）

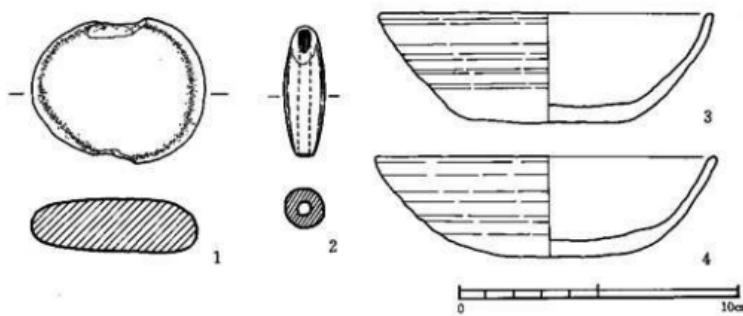
耕作土下、第Ⅱ層から出土した遺物に坏、石锤、土锤がある。第Ⅱ層については、面的に精査をおこなっていないので、石锤、土锤については試掘の際に検出されたものである。

第14図3、4は坏である。これは、表土剥ぎをおこなうために、前年の工事途上でのこされた垂直に切り立った崖面を重機が切り壊す際に第Ⅱ層の壁面に露出したものである。露外面壁の精査にかかわらず、その漆黒土層中に何らの遺構断面を検出し得ていない。

3. は口径11.9cm、器高3.8cm、厚0.3cm、底部厚0.6cmを測るもので、平底から角度をもって明瞭にたちあがり、口縁部で丸くおさめられる。ヘラ切り底である。4. は口径12.2cm、器高3.1cm、厚0.3cm、底部厚0.6cmを測る。3.に比較して、底部からまるみをおびてゆるく立ちあがっている。同じくヘラ切り底を有する。

石 锤

偏平な丸礫は砂岩製で、熱を受けて赤褐色化している。通常この種の礫石锤は長軸の両端打欠のものが多いが、これは短軸両端に打欠があるので特色がある。長軸長6.0cm、短軸長4.6cm、厚1.8cm、重量89gを計測する。



第14図 石錘・土錘・壺実測図 (1/2)

土 錘

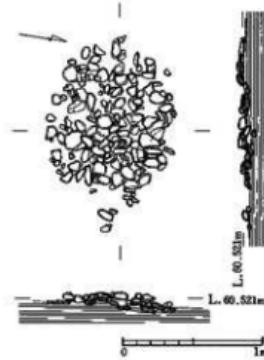
端部を欠損している。表面ナゲ調整、黄橙色を呈する。現長4.6cm、厚1.4cmである。

第3節 遺構 (IV層上面)

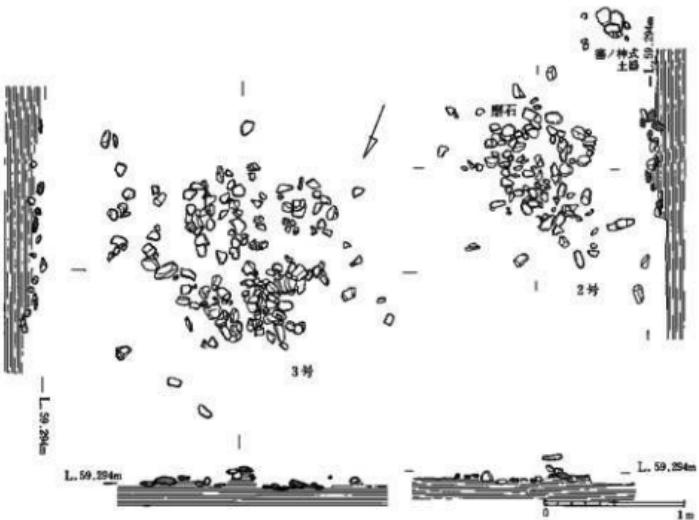
赤ホヤ火山灰層 (III層) の直下面から検出した遺構には、集石遺構 (6基)、土塹2基がある。

1号集石遺構 (15図)

西端発掘区の標高 61.48m にある。南北93cm、東西120cm のほぼ円形、しかも密に集石する。付近に散石はみあたらない。構成礫は円形偏平礫がほとんどを占め、他の集石が角礫主体に構成するのに対照的である。円礫は大きなものでも12cm×15cmを測り、ほとんどが赤化、あるいは赤褐色を呈し火熱を受けたことが歴然としている。集石下に掘り込みではなく、集石下の土層は暗褐色ロームである。集石一帯は黒ニガ層が薄く堆積するにとどまり、集石は赤ホヤ直下にある。円礫間に炭火物等は検出されていない。



第15図 1号集石遺構実測図



第16図 2・3号集石遺構実測図 (1/40)

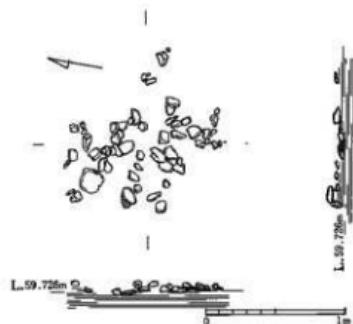
2号集石遺構 (16図)

発掘区の北西隅に位置し、3号集石に近接している。標高 59.24 m にある。焼礫は南北約 120cm、東西約 90cm の楕円状に散布する。礫は火熱を受けた角礫の破碎したもので、床面に掘り込みをもたず、旧地形そのままに北に緩傾斜をもって集石されている。集石中に磨石一点を検出し、集石外の同レベル面より塞ノ神土器片一点、円盤状石器 2 点を検出している。その他 2号集石の約 10cm 上面より破碎して 3 点に割れた石皿があるが、これも火熱をうけ赤化している。石皿はその出土層位から、明らかに 2号集石と時期を異にしており、石皿上面で赤ホヤ直下となる。2号集石遺構床面は暗褐色ローム土となっており、上層の黒ニガ層はこの地点では極めて薄い。

3号集石遺構 (16図)

2号集石に近接しており、2号集石から北北東 2m の位置にある。南北約 130cm、東西約 140cm のほぼ円形に集中し、2号より二まわりほど大きい。構成礫は破碎した角礫がほとん

どであるが、円礫も散見する。いずれも火熱をうけて赤化、あるいは灰白化している。礫間に塞ノ神土器片一点を検出している。集石下に掘り込みをもたず、礫は平面的に散布している。礫間は黒ニガがはまるが、床面は暗褐色ローム土となる。前述の土器片の他は炭化物、炭化粒等は検出していない。



第17図 4号集石遺構実測図 (1/40)

4号集石遺構 (17回)

2・3号集石遺構から南南東、約10m、標高59.72mの位置にある。南北約110cm東西約90cmにやや疎に集石する。構成礫は破碎した角礫が、ほぼ水平に集石する。角礫はすべて火熱を受け、集石下に掘り込みはない。集石床面は黒褐色小白斑ローム(黒ニガ)である。

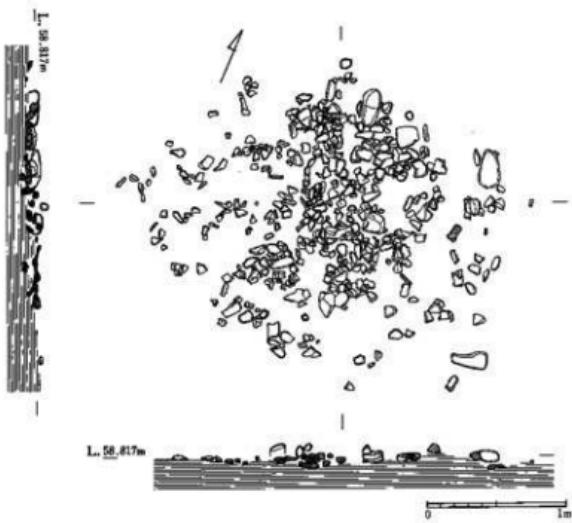
5号集石遺構 (18回)

4号集石遺構から北東に2.8m、標高58.817mにあって発掘区の北端に位置する、南北約210cm、東西約260cmのはば円形に集石している。本遺跡の集石遺構中、6号集石に次ぐ規模である。破碎して小破礫となった拳大に満たない角礫が多いが、なかに20cm×15cm大の円礫を外縁に含んでいる。火熱を受けており、赤化、灰白化した礫がほとんどである。礫中に遺物を含まず、炭化粒を極稀にみる。これも、集石下面に掘り込みをもたず平面的に散石する。

6号集石遺構 (19回)

発掘区のほぼ中央にあって、本遺跡検出の集石遺構中最大規模をもち、南北190cm、東西250cmに集石している。標高は58.60mを測る。礫は他の集石のそれより比較的大きなものが目立っており、平均して拳大より大きな礫が多い。角礫のなかに比較的大きめの丸礫、偏平丸礫が混る。なかでも集石西隅に位置する偏平丸礫は、25cm×20cmを測る。

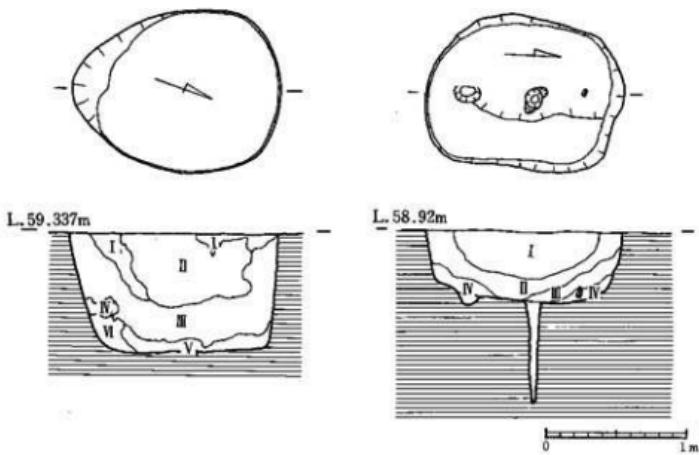
礫は例外なく焼けており、灰白化、赤化が著しい。この集石遺構も、集石下に掘り込みをもたず平面的に展開している。集石の北端隅に塞ノ神式土器片を含み、礫間の土中に黒曜石



第18図 5号集石遺構実測図 (1/40)



第19図 6号集石遺構実測図 (1/40)



- I 暗褐色土 石英、微粒を含む。サラサラしており粘性をもつて小。軽いがしまっている。
- II 黄褐色土 赤ホヤの風化したものかとおもわれる黄色土をブロック状に含みフワフワしている。
- III 褐色土 褐色土に明褐色土が雲状に混じる。また黄色火山灰が極小量混じる。
- IV 褐色土 V層よりやや明るい褐色を呈する。褐色土に明褐色土が雲状に混入する。粘性大でかたくしまっている。
- I 黄褐色土 サラサラして透水性大。赤ホヤの小ブロック、炭化粒を含む。
- II 褐色土 やや粘性があるものの透水性大。
- III 明褐色土 II層よりさらに粘性を帯びるが透水性がある。
- IV 暗褐色土 いわゆる黒ニガに近い。堅い黒褐色土をブロック状に含む。
- V 明褐色土 IV層より明るい色調をして、粘性をもちやわらかい。
- VI 褐色土 明褐色土のなかに褐色土を雲状に含む。

第20図 4・5号土壤実測図 (1/40)

チップが出土している。6号集石周辺の土層は、他の集石周辺土に比べて黒味が強くて、粒子も粗く、いわゆる典型的な黒ニガといわれる土壤である。この黒ニガ土上に営まれた6号集石下は約50cmの深さでこの黒ニガ（黒褐色小白斑ローム）がつづき、以下褐色ローム層となる。この集石下の黒ニガ中には、粘性の強い明褐色ブロックが混じっている。これは、灰が変質したものではないかと考えている。それほど、礫の赤化は著しく火をながく受けたものと想像される。礫の石材は、ほとんどが尾鈴酸性岩類で占められている。

4号土壙（20図）

S1 2・3号から東に2mの近距離に位置する。長径140.8cm、短径110.7cm、深さ88cmあって、平面形は卵形、底はフラットになっており小穴等はみられない。埋土は基本的には黄褐色の透水性大の土質となっている。集石造構とほぼ同時期のものと考えられるが、炭化物、土器等遺物を含まず、その集石造構との関連や機能は確かでない。

5号土壙（20図）

発掘区の東端に位置し、周辺に造構をみとめない。長径140cm、短径106cm、検出面からの深さ50cmを測るが、土壙底中央に径12cm、深さ74cmにおよぶ深い小孔と、南端に径15cm、深さ12cmの小孔を穿っている。これらの小孔により、いわゆる「陥し穴状造構」とよばれいる造構に類似している。

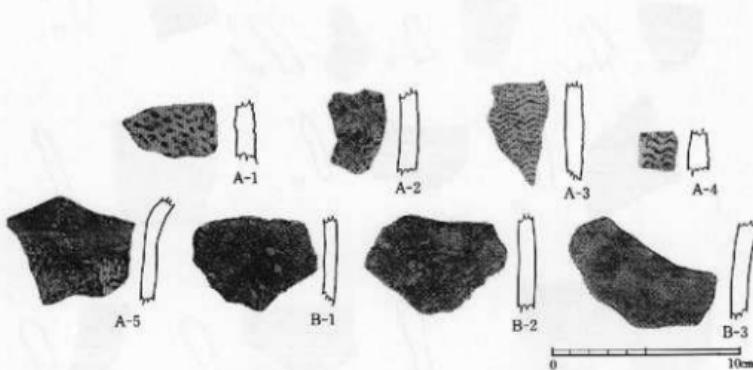
第4節 遺物

1. 繩文土器

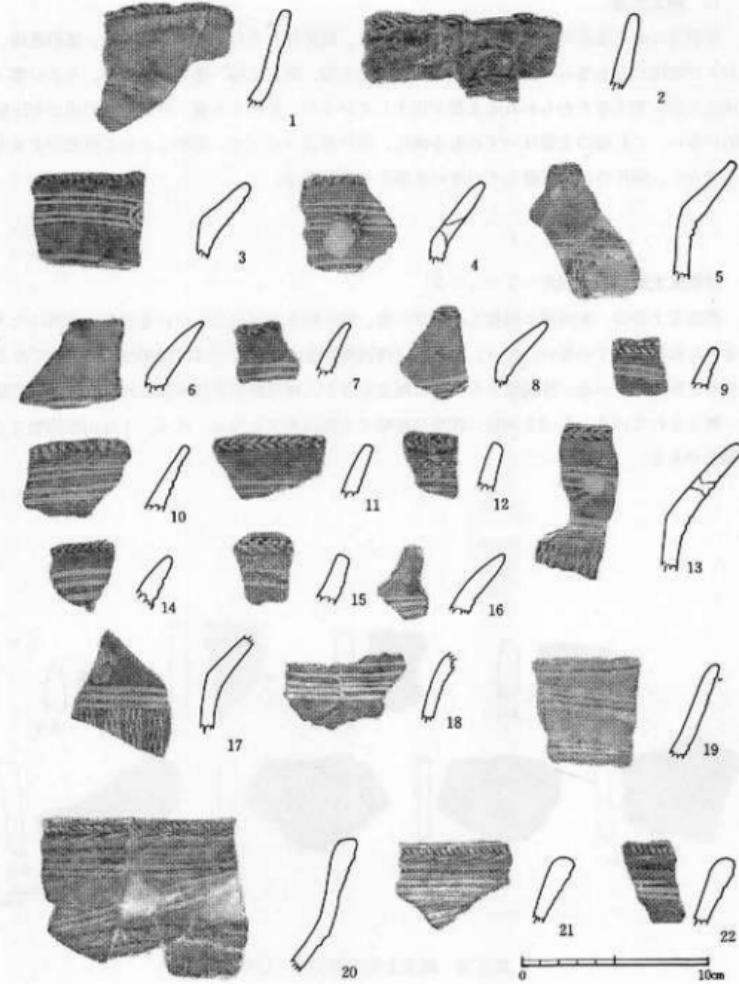
第Ⅲ層にあたる赤ホヤ火山灰層の最下端部と、第Ⅳ層とそれが接する面から、集石遺構、および散礫にともなって出土している。押型文土器、無文土器、塞ノ神式土器、および塞ノ神式土器に類するとおもわれる土器が出土しているが、そのうち塞ノ神式土器の出土が圧倒的に多い。これ等の土器はいずれも小破片、碎片がほとんどで、完形にちかく復元できるものはなく、碎片のため実測していない土器片が多数ある。

押型文土器（第21図A-1～A-5）

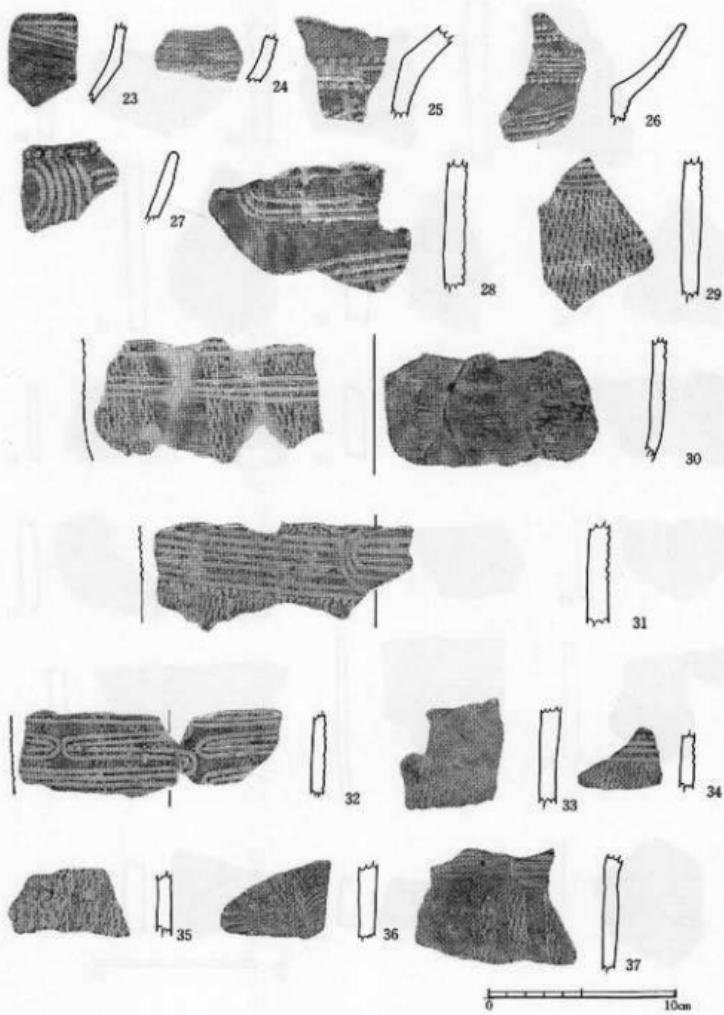
押型文土器は、実測図に掲載した4点の他、碎片約8点が出土しているが全て実測にたえないため掲載していない。A-1、2、5は楕円押型文土器でA-5は口縁部付近の破片でゆるやかに外反している。外反部から上方は無文となる。楕円押型文自体は乱れて、極めて粗略に施文されている。A-2も同様に押型は粗略で上部は無文となる。A-3、4は山形押型文土器片である。



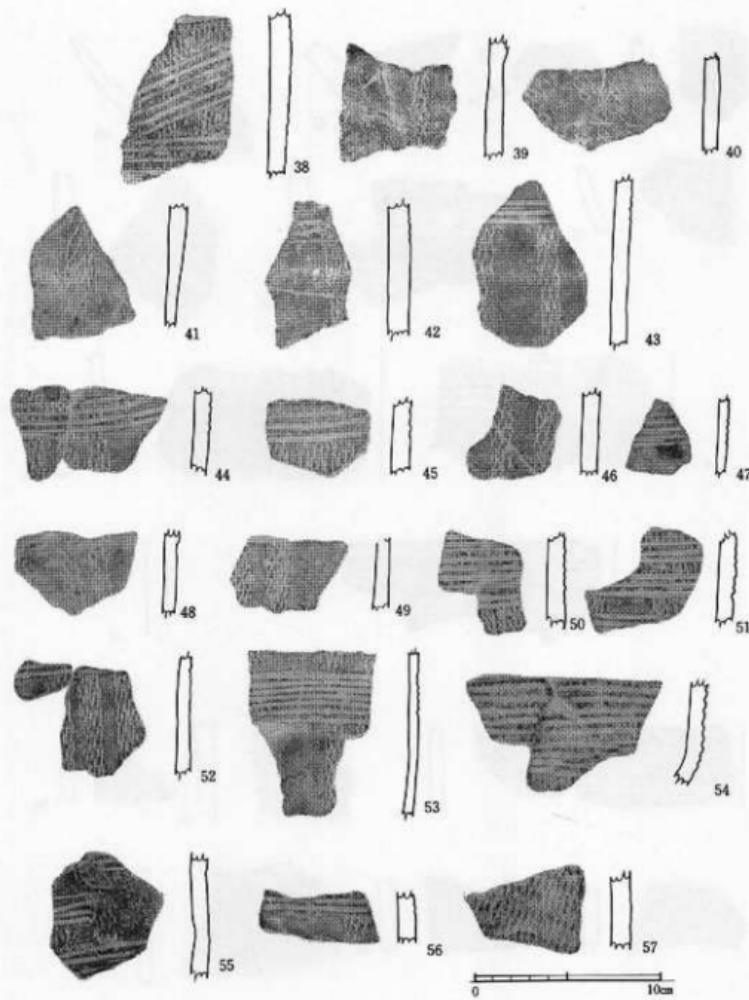
第21図 繩文土器実測図(1) (1/3)



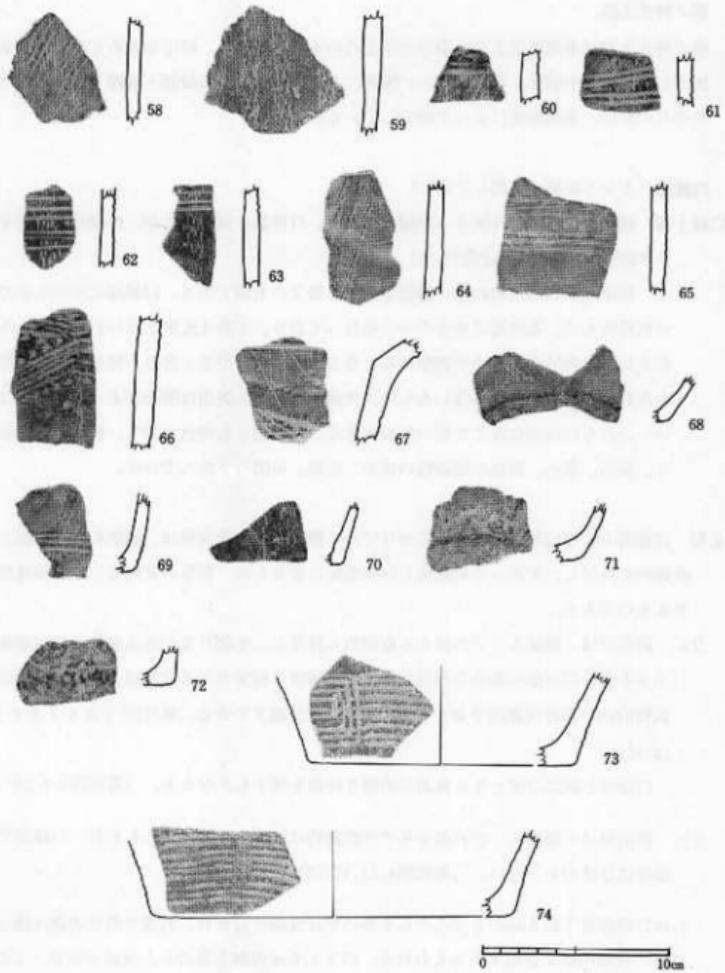
第22図 繩文土器実測図 (1/3)



第23図 繩文土器実測図(3) (1/3)



第24図 繩文土器実測図(4) (1/3)



第25図 繩文土器実測図(5) (1/3)

塞ノ神式土器

塞ノ神式土器は本遺跡出土の土器の主体を占める位置にある。碎片を含めて約180点余り出土しているが小破片。碎片が多い。実測にたえうるものを口縁部・胸部・底部にわけそれぞれの形状、文様構成によって細分している。

口縁部（IからIV類に分類している）

I類 頸部からゆるく外反する口縁部である。口唇部に刻目をもが、口縁外面は無文でナデ調整となる。（第22図1.2.）

1. 器厚4.0mmの比較的薄い器壁を有する無文の土器である。口唇部にやや太めで粗い刻目をもつ、器外面はゆるやかに波打っており、丁寧な成形とはいいがたい。灰白色をして、内外面ともナデ調整のみとなる。長石をやや多く含み、他に石英、角閃石を含む。2. は3点が接合したもの、外面は無文で、表面は凹凸があって滑かではない。これも口唇部に太くて粗い刻目がある。内外面とも橙色を呈し、胎土はきめ細かく、長石、黒色、茶色の細砂粒のほか、石英、角閃石を含んでいる。

II類 口縁部および口縁部から頸部にかけての一群である。断面形は、頸部のくびれ部から直線的に外反し、先細って尖鋭化し口縁端部に至るもの、器厚の変化なしに口縁端部に至るものがある。

IIa 断面形は、頸部のくびれ部から直線的に外反し、先細りながら尖鋭化し口縁端部に至るもの、口唇部に細かな刻目をもち、口縁部に施される文様は、2～4条単位の比較的浅い平行沈線間でおりなされる幾何学沈線文である。（第22図3.5.6.7.8.9.10.14.16）

口縁部と胸部の境となる裏面に明瞭な後線を残すものがある。（第22図3.6.13）

IIb. 断面形は、頸部のくびれ部からやや直線的に外反するものとおもわれ、口縁部でも器厚はほぼかわらない。（第22図4.11.12.13）

3.は口縁部直下約6mmのところから4条の平行沈線が引かれ、右端で弧状の曲沈線がみられ、長楕円形文を呈すとおもわれる。以下1.6cmの無文帯のあと沈線が巡る。これはにぶい褐色を呈し、胎土に比較的多めの長石のほか、石英、角閃石を含むが、この3.だけは金雲母を多く含んでいる。内外面とも、丁寧なナデ調整がなされている。

4. 13. には口縁下ほぼ同位置に焼成後うがたれた孔をみる。4.は外面一方からの、13

は内外面両方向からの穿孔である。13. には頸部外面屈曲部の二条の沈線直下に、縦位に施文された網目状燃糸文がみられる。4.13. とも内外面ナデ調整、13はとくになめらかにナデられている。胎土に長石、石英、角閃石を含むが、4. のそれはやや粒子が大きく、13は、極微粒子である。6. は尖銳化した口縁端が特徴で、口唇部に細かな刻目が羽状に丁寧に施されている、二状単位の平行沈線が横位に施文されているが、口縁直下の一単位は特に浅く、ナデられた程度である。内外面とも明黄褐色で、微粒の長石、石英、角閃石、金雲母を含む、10. は内外面の風化著しい。比較的大粒の石英、角閃石を多く含んでいる。

III類 口縁先端と基部の厚さはさほど変わらず、直線的に外反するものとおもわれる。

口唇部外側にひじょうに細かな刻目、口唇直下に微隆起刻線が巡っている。以下は3条あるいは4条単位の浅い沈線文となる。

19. は器厚6mmを測り、先端丸くおさめられる。口唇直下の微隆起刻線は幅わずか2mmで、直下にこれも幅2mmの沈線が施される。以下4条の沈線は同じ幅をもって、右下がり斜位に施す、内外ともナデ調整、にぶい橙色をしている。

IV類 頸部から口縁端にゆくにしたがって肥厚してゆき端部で水滴状に丸くおさめられる特徴的な口縁を有する。口唇部に刻目を有する。口唇直下と頸部の屈曲部に微隆起刻線文が施され、頸部のそれは二条となる。微隆起刻線文間に3条単位の平行沈線が横位、斜位に施される。（第22図20.21.22第23図23.24.）

20. 21. 22. は口縁部、23. 24. は頸部の屈曲部分であろう。これらは、本遺跡においてもっとも特徴的な口縁形態を有する一群である。20. 21. は口唇部に二条の羽状の刻目、22には一条の刻目を有する。20の微隆起刻線は口唇部直下約7mmの部位へ幅2mmをもって巡る。頸部屈曲部のそれは、約8mmの間隔をもって平行に巡っているものと考えられる。微隆起刻線の盛り上がりは1mmあるかなしかの文字どうりの微隆起である。上部一条、下部二条の微隆起刻線間に、3条、2条単位の沈線が、横位に走る。沈線幅は約2mmを測る。20の内面は極めて丁寧なナデ調整。長石、石英、角閃石を胎土に含むが、長石の含有がやや多い。表面橙色、裏面にぶい黄橙色を呈している。器厚、口縁最大厚9.0mm、残存部最少厚5.0mmを測る。以下21. 22. 23. 24. とも色調、胎土とも20. と大差ない。

V類 平行する沈線と刺突列点で構成される口縁部をもつ一群である。

Va 頸部から直線的に外反する口縁部を有し、文様パターンは、横位の沈線とそれにそって密に施される刺突列点文である。（第23図25）

25. は器厚1.1cmを測りやや厚手であるが、焼成はあまく、ややもろい。にぶい黄褐色を呈して、内面はナデ調整となる。石英、長石、角閃石を含み、それらは極微粒である。

Vb 頸部から口唇部に向って、ゆるく内湾しながら外傾するもので、口唇部にゆくにしたがって除々に薄くなる。文様パターンは、横位の1~3条平行沈線とそれにそって密に施文される刺突列点文である。(第23図 26)

26. は頸部に3条の平行沈線がみえ以下は網目状撚糸文が一部観察できる。よって胴部は平行沈線+網目状撚糸文の組合せと推定せられる。内面の頸部接点の棱が明瞭である。内面ナデ調整、極めて微粒の石英、長石、角閃石を含み、全体に堅緻、丁寧につくられている。明褐色を呈している。

VI類 やや内湾しながら、全体は外傾する口縁部になるものとおもわれる。文様パターン 口唇部に刺突列点文にちかい刻目をもち、5条から6条の縱位、横位の平行沈線を幾何学的に施している。(第23図 27) (第23図 27)

第23図27の一点が出土している。内面ナデ調整、微粒の石英、角閃石、長石を含み橙色を呈している。

第23図28から第23図67までは胴部の集成である。胴部は部位によって施文される文様が異なるが、完器形での文様構成が不詳のため主に用いられる撚糸文、平行沈線、曲沈線、列点文による組合せによって以下のように分類している。なお、復元作業によって2、3点が接合し、胴部径の推定ができたものは、第23図の30・31・32の3個体である。

胴部I類 胴部破片に数条の撚糸文のみとめられるもの。(第23図33、35、36、第24
図39、40、41、46、49、57、第25図58・59・64)

胴部器面に撚糸文のみがみとめられる一群であり、胴部でも上位に位置する破片と考えられ、より上位、あるいは下位に施文されるべき平行沈線を欠くもの。回転による撚糸文、網目状撚糸文を、無文域(帯)を挟んで縱位に数条施す。

II類 数条の平行沈線と撚糸文で文様を構成するもの。(第23図29、30、34、第24
図38、42、43、44、45、47、50、51、52、53、54、56、第25図60、61、62、63、
65)

基本的な文様の施文は次のとおり。縱方向に回転押捺した幅の狭い撚糸文帶を無文帯を挟んで数条施した後、平行沈線を数条単位で巡らすものである。平行沈線は、横位3条が一単位としてみとめられるもの(30、34、42、43、45)。

60)、横位4条を一単位とするもの(44)、7条のもの(53)、6~9条以上みとめられるもの(47. 54)、横位3条一単位が上下数段にわたり施文されるもの(30. 51. 62. 65)がある。

第23図30、3点が接合したもので推定胸部径30cm、器厚6mmを計測する。下端がややすばり底部に近い部位であろう。幅約1cmの網目状燃系文が概位に6条みとめられ、上位に2段の3条一単位の沈線がある。下部に調整孔あり、裏面は横方向の粗いナデとなって条痕状を呈している。胎土に石英、角閃石、砂粒、長石を多く含むが、ときに4mm大の白色石(長石か)をみとめる。内外とも橙色をしている。

第23図37は口縁が外反して屈曲する部位から胸部にかけての破片である。やや器面に風化がみとめられるものの、3条の幅約1cmの燃系文が無文帯を挟んで施される。破片左側の無文帯は他に比してその域が広い。器厚0.6mm、石英、角閃石の他、長石の極微粒が多く含まれている。焼きはやや軟である。外面にぶい橙色、ナデ調整された内面は灰褐色を呈する。第24図38は全面粗い燃系文施文の後、平行沈線を上位、下位(4条)にもち、その間を6条の斜位の平行沈線が通る、胎土に極端に多い石英粒を含み、器面のあれた部分では触るとボロボロとなるほどである。他に角閃石、茶砂粒を含む、この胎土の特徴から、第23図31とおそらく同一個体であろう。第24図43は幅1.2cmの燃系文3条に、平行沈線3条一単位が上部にみえる。胎土は粒子細かい石英、長石、角閃石がみとめられ、焼き堅調である。外面の無文域、内面ともナデ調整で外面は灰褐色、内面明褐色を呈する。53は器厚4mmを測る薄いもので、7条で密な平行沈線を有する胎土に石英、長石、のほか金雲母を顯著に含んでいる。外面にはぶい橙色、内面は粗くけずられた後ナデされている。内面にもぶい橙色となる。

54. は全面に施された燃系文のあと横位の平行沈線が、現状態で9条にわたって施される。胸部に分類したけれども、下端の屈曲により口縁部付近かもしれない。内外面橙色を呈し、胎土に微粒の石英、長石、角閃石を含む。内面ナデ調整となる。65の燃系文は他のそれに比べて、より直線的な細線となっているが、手法には相違を感じない。外面明黄褐色、内面は暗褐色を呈する。

Ⅲ類 数条の平行曲沈線文と燃系文で文様を構成するもの。(28. 32. 37. 55)

28. は器厚1.1cmと厚い胸部である。4条の継位燃系文を施文した後、3条單

位の平行曲沈線をみる。外面橙色で極めて堅調である。石英を多く含んでいる。32. はうすい器壁を有し、灰褐色を呈する。比較的小型の土器で胴部径12.0cm(推定)を測る。6条の縦位撚糸文のあと、2条単位の平行曲沈線を流水文状に施文している。口縁に近い部位かとおもわれる。内面の調整は横方向のヘラケズリである。胎土は粒子がそろって細かい、37. 口縁部と胴部のくびれ部付近とおもわれる。そのくびれ部外面に平行沈線と曲沈線が施文され、以下3条の縦位撚糸文が観察される。

- IV類 横位の微隆起刻線文と縦位に施文された撚糸文で文様を構成するもの。(48)
48. は微隆起刻線文からして口縁に近接した部分かとおもわれる。風化が著しく撚糸文が消えかけている。明黄褐色をして、粒子は比較的細かであるが白色粒がきわだっている。焼きはもろく軟調である。

- V類 平行沈線とそれに平行して施される列点および撚糸文によって文様を構成するもの。(66)

66. は5条の平行する沈線が斜走、屈折し、その上下に列点が配置される。撚糸文は、平行沈線に先だって施文されている。撚糸文様帯は極端に狭い。器厚は1.1cmと厚手である。

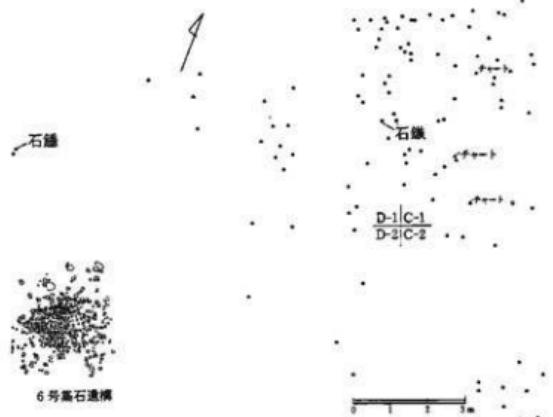
- VI類 撥糸文のほか、多条の平行沈線、曲沈線および列点文で文様を構成するもの。
(31) 31. は胴部径(推定)22.6cmを測る。胎土に石英を多量に包含しており、焼成も軟調のためボロボロ落ちる。裏面はナデ調整となる。胴部でも上位に位置する部分とおもわれ全面に縦位の撚糸文のあと、全周する7条の平行沈線および3条の曲平行沈線が組合わされる。

底部 (第25図68. 69. 70. 71. 72. 73. 74)

68. 70. には胴部下位から底部にかけて縦位の撚糸文をみる、70. のそれはやや粗い。68は浅黄橙色、70. は橙色を呈する。69. では縦位の撚糸文を施文した後、底部直上に3条の平行沈線を引くもので、胎土に金雲母を含んでいる。明褐灰色をして、内面丁寧なナデ調整となる。71. 72は外面がひどく風化、劣化している。71. にはうすく撚糸文をみる。以上いずれも、平底、あるいは軽い上げ底気味になる底部かと考えられる。

73. 74. は同種のものとおもわれ、平底の底部より、立ちあがる。残存部分である胴部下位から底にかけて、幾何学文様の沈線が主に横位で幾本も引かれている。よく観察すれば、沈線間に撚糸文をみることができ、縦位の撚糸文施文のあと、これらの幾何学

的平行沈線が施されたことが窺われる。明黄褐色からにぼい橙色をしており、長石、石英を含み、角閃石の含有が少ない。



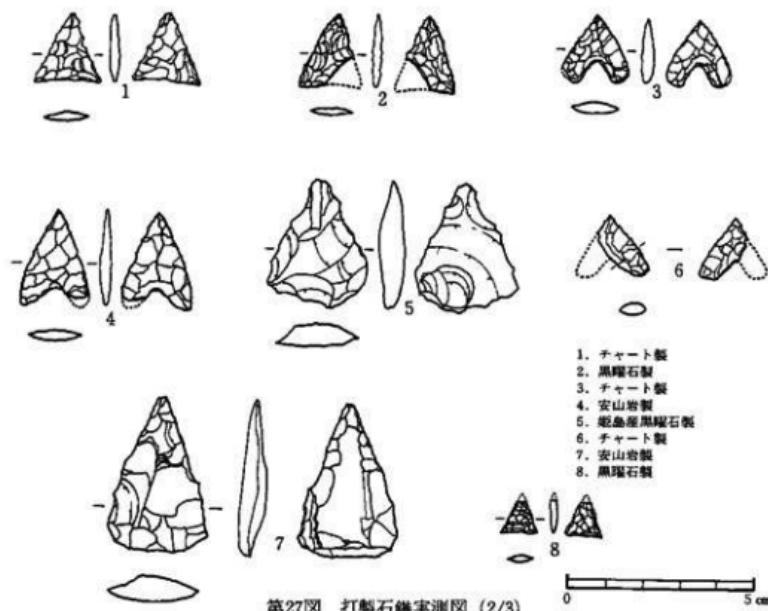
第26図 6号集石遺構付近遺物分布図
(三角点は黒曜石・チャートのチップ、黒丸点は土器片、白丸点は姫島黒曜石のチップ)

2. 石 器

集石遺構を検出した層、すなわち焼礫が散乱する面から、焼礫に混じって種々の石器、剝片が出土している。器種には、石縁、石槍、円盤状石器、スクレイバー、磨石、石皿のほか、使用痕のある剝片、その他の剝片がある。

打製石縁 (27図)

打製石縁は8点出土している。形態的には平基式、凹基式、錐形式に大別され、極めて小形のもの(8)、極めて大形のもの(7)2点を含む、5以外はいずれも入念な交差剝離がなされている。5は主要剝離面を明瞭に残している。石材はチャート、黒曜石、姫島産黒曜石、安山岩が用いられている。

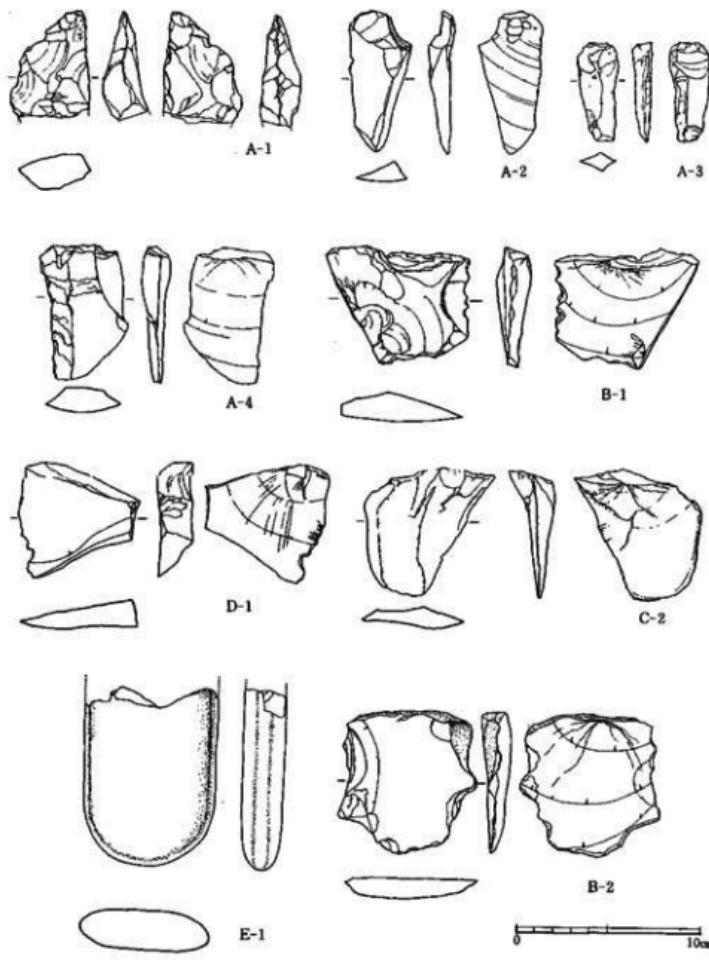


第27図 打製石器実測図 (2/3)

- 1. チャート板
- 2. 黒曜石製
- 3. チャート製
- 4. 安山岩製
- 5. 姫島産黒曜石製
- 6. チャート製
- 7. 安山岩製
- 8. 黒曜石製

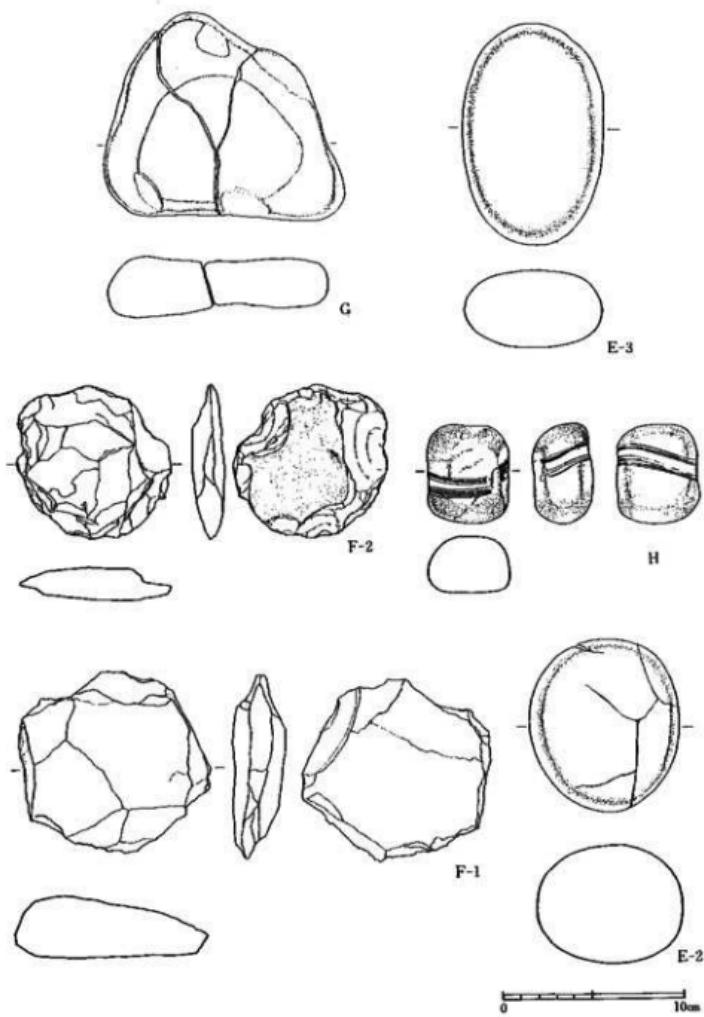
第1表 打製石器観察表 () の値は推定値

番号	全長 (cm)	最大巾 (cm)	厚さ (mm)	石 材	備 考
1	1.9	1.85	2.5	チャート	平基式
2	2.2	(1.7)	2.0	黒曜石	平基式 脚部欠損
3	2.0	1.9	3.0	チャート	鍔形式
4	2.65	1.8	3.0	安山岩	凹基式
5	3.6	2.7	6.0	黒曜石(姫島産)	平基式、主要剥離面を残す
6	1.65	(1.8)	3.5	チャート	鍔形式、脚部欠損
7	4.1	2.6	7.2	安山岩	平基式 極めて大型
8	(1.1)	1.0	2.0	黒曜石	平基式 極めて小型、先端欠損



第28図 石器実測図(1) (1/3)

(A-1,2,4 暗灰色頁岩、A-3 黒曜石、B-1,2、C-2,D-1 明褐色硅質凝灰岩、E-1 硬質砂岩)



第29図 石器実測図(2) (1のみ1/6、他1/3)

尖頭状石器 (28図 A-1)

交互剝離による調整をおこなって尖端部を形造る。側縁の一方は直線となり、いわゆる半月形石器様を呈する。現長、5.8cm、幅4.2cm、厚さ2.0cmを測る暗灰色の硅質凝灰岩製である。

縦長剥片 (28図)

A-2. 長さ7.5cm、最大幅3.4cm、最大厚1.1cmを測る暗灰色の頁岩製である。ナイフ形石器様の素材剥片である。腹面にバルブ、バルバスカーを観察し、平坦打面を残す、刃部に使用痕はみとめられない。

A-3. 長さ5.3cm、最大厚0.9cmを測る気泡のめだつ黒曜石製である。腹面のバルブを剥ぎ取っている。背面の左側面は磨ガラス状を呈しており、原面がそのまま残る。

A-4. 長さ7.7cm、最大幅4.3cm、最大厚1.3cm、腹面にバルブ、背面は節理不良のため面が粗い。

スクレイパー (28図)

B-1. 片側縁に背面より加えられた剝離痕が器軸に平行してならぶ。腹面にバルブをみとめ、平坦打面が残る。

B-2. 自然面を打面として剥ぎとられたやや幅広の剥片を素材としている。自然面を除く他周縁をやや粗雑な調整によって刃部としている。腹面に明瞭なバルブが認められる。

使用痕のある剥片 (28図)

C-2. 長さ7.0cm、最大幅6.7cm、最大厚2.1cmを測る。背面には器軸にそって縦長に剥ぎとられた一面があり、周縁は薄く刃状になって左辺を中心に使用痕とおもわれる刃こぼれがみられる。腹面に明瞭なバルブ、平坦打面がのこる。

磨 石

E-1. 直線にのびる両側辺をもつ偏平な磨石である。極めて硬質な流紋岩製で両平坦面は平滑で光沢がある。現器長9.5cm、器幅7.0cm、器厚2.2cm。

E-2. 2号集石遺構中に組込まれていたもので、球形にちかい。高熱にさらされていたためか、ひび割れが観察され、媒が付着している。短径8.05cm、長径9.3cmを測る流紋岩製

である。

E-3 長楕円形の偏平な磨石である。灰色の中粒砂岩製、器長12.0cm、器幅7.5cm、器厚4.1cmを測る。

円盤状石器 (29図、F-1、F-2)

2号集石遺構の中心から南、3.1mの地点において二点の円盤状石器が出土している。

F-1は直径9.6cm、厚さ3.3cmを測る安山岩質である。両面より求心的に剝離を加えて、周縁に刃部を形成するが、縁部の一部分に未調整の自然面を残す未成品である。片面により多くの剝離面がみられる。

F-2は、薄く剝がれる性質をもつ粘板岩質の石材で成形され、直径8.1cm、厚さ1.7cmを測る。片面に平坦な自然面を残し、両面から中心に向かって剝離が加えられて周縁に刃部を形成するが、周縁部の一部に平坦部が残って未成形となっている。

石皿 (29図G)

2号集石遺構の北側から3点に割れて出土したもの。熱を受けて、所々が赤化している。中央付近から凹んで磨面を形成するが、裏面にも凹面があつて、両面ともに磨面に供されたものとおもわれる。器長21.8cm、器幅25.7cm、器厚6.4cm、重量4.6kgを測り、細粒砂岩でできている。

第3章 まとめ

水谷原遺跡の発掘調査では、縄文時代早期の集石遺構・土壌、および遺物として縄文土器、弥生土器を検出確認しているが、ここでは主な遺構・遺物について若干のまとめを記す。

一集石遺構について一縄文早期の集石遺構の検出例、および焼礫散布地の確認箇所は、最近では枚挙にいとまがないほどで、その遺跡密度の濃さについては驚異的ですらある。集石遺構については形態上の分類を研究の端緒としながら、機能面、用途にせまる試みがなされようとしているところであるが、遺構検出の増加にもかかわらず、なお決定的な用途の把握には至っていないのが現状のようである。^{註1}

集石遺構を検出する遺跡の立地については、台地の縁辺部、および沖積地にはりだした舌状丘陵の平坦部、台地のやや内部に立地する場合は、湧水地のある開析谷の近辺等ある程度パターン化している。当遺跡の場合は、台地の縁辺部にあたり、最寄りに湧水点があって、小開析谷が発達しているという環境下にある。水谷原遺跡の集石遺構から抽出できる若干の特徴について、まず形態的にみた場合、6基の集石遺構がすべて平面的にほぼ円形に集石するタイプであり、集石下部に焼礫を充填するための掘り込み（土壌）をもたないという特色がある。勿論、これは廐棄礫のブロックとしてはとらえられない。多くの早期遺跡の場合、集石遺構直下に掘り込みのあるタイプが、平面的に集積するタイプより卓越するのがこれまで一般的であることを考慮した場合、本遺跡の平面的集積タイプが時間的な要因によるものか、用途の相違によるものか、なお決定的な検証をなし得ない。ただ、同層位面で検出された土器を検討すると、押型文、塞ノ神式土器を検出した他は、共伴することの多い吉田・前平式の貝殻条痕文系土器を全くみないという特色をもち、主体を占めるのは塞ノ神式のなかでもAa式にあたっている。このことは本遺跡の集石遺構が縄文早期後半のある限られた一時期を示す可能性のあることを示唆している。

各集石遺構の集石された焼礫の石材は、角礫主体の集石の場合（S I 2・3・4・5・6）石英粒を多く含み極めて硬質の尾鈴酸性岩類流紋岩質溶結凝灰岩がほとんどすべてを占め、円礫を主体として集石しているS I 1は、硬質砂岩がその構成礫のほとんどを占める。尾鈴酸性岩類流紋岩質溶結凝灰岩は児湯郡内の岩層を構成するもっともボビュラーな石材であるが極めて硬質であることと、薄く剥がれる性質をもたないため、石器の石材としては限定されるようで、石錘・石皿としての使用例がわずかにみられる程度である。遺跡の身近では、南斜面において人頭大より二三わりほどの大きな円礫として容易に入手することが可能である。一方、S I 1を構成する砂岩製円礫は、いわゆる河原礫であるが、遠方の河谷から運搬

してきたものと理解するよりは、おそらく最寄りの開析谷の湧水地に露頭するより古層の礫層から入手したものと考えるほうが妥当であろう。

6基の集石造構を形態的な分類のひとつとして、使用礫の形状から円礫使用、角礫中心使用の2種に分けたが、礫の加熱度合や、集石造構施設下の土の焼け具合を、その使用頻度あるいは、用途の相違として仮定した場合、再度次の2種に分けられた。ひとつは、被熱による礫の色調の変化、破碎が極端ではなく、炭化粒・灰・焼土が認められず、施設としての継続性、あるいは頻度が少ないとおもわれるもの(SI 1・2・3・4・5)、ひとつは継続的な使用により著しく用礫が加熱され、色調変化も著しく(赤化→赤褐色化)、礫下部に灰〔暗褐灰粘性土(Hue7.5 YR7/2)がラミナ状に入る〕の堆積がみとめられるもの(SI 6)である。SI 6はその用礫の著しい焼け具合と、集石下部の灰層とにより、多量の粗朶が繰り返し燃やされて用礫の加熱に用いられたものと想定される。よって、このSI 6のみが、その場で加熱された燃焼痕跡が残るもので、他はその痕跡を残さず、別の施設で加熱されたものを運搬集積したものとみることができる。このことは、SI 6が焼礫供給源としての礫加熱施設として機能していた可能性を考えられる。SI 6の位置が9図でみられるように、溶結凝灰岩の転礫群近くに位置していることも、一見その蓋然性を高くしているが、ただ、そうであればなぜ運搬されないうちに放棄されたのか、また他のSIを構成する礫よりも過加熱であるかという矛盾も指摘できるのである。

以上、系統性もなく思いつくままに本遺跡の集石造構から導きだせる諸事項を、やや主観的に述べた。集石造構をめぐっては、例えばそれが「食」にかかわる施設であったとすれば土器は集石造構といかに係ったのか、あるいはその「食」は日常的な「食」であったのか、非日常的(暗または忌)な「食」であったのか——それに関連して集石造構中にしばしば石器が組み入れられるのは何らかの祭祀的意図があったのではないか——等々の興味の尽きない素朴な疑問が多々ある。

—縄文土器について—

当遺跡で出土した縄文土器は総計約300点余を数える。その内訳は、押型文土器約10点(碎片含)、塞ノ神式土器約175点、その他無文あるいは紋様不明の胴部片約125点である。各土器形式の共伴関係について特記されるのは、集石造構を検出する早期の遺跡において共伴関係にあることの多い貝殻条痕文系土器(吉田・前平式等)を全く出土しなかったことで、当遺跡はまさに塞ノ神式土器のある一時期を示しているようである。

塞ノ神式土器の内訳は、無文の口縁部2点、Aa式約80点(口縁含)、Ab式1点、塞ノ神

式に類するもの 6 点となり、塞ノ神式のなかでもいわゆる Aa 式の出土が他を圧している。口縁端部が水滴状にふくらむ口縁部脣類の出土は、県内では類例なく、器面をめぐる微隆起刻線文等の特徴的紋様から平拵式に近いものと考えている。この IV 類にもっとも類似するものとして、隣県鹿児島の木場 A 遺跡（栗野町）出土の 5 類土器をあげることができる。^{註3} また底部（25図73・74）は、塞ノ神式 Aa, Ab 式とともにあてはまらず、この口縁部 IV 類の底部につながる可能性がある。いずれにせよ、塞ノ神 Aa 式に後続するものであると考えられる。

一 弥生土器について一

弥生土器は、住居址等の遺構に伴っての出土ではなかったものの弥生時代前期後半に比定される彫形土器、同後期前半にあてられるミニチュア高環形土器が検出された。

彫は全体に小形で、平底、胴上部に最大径をもち、張らない器形で、口縁端の刻目が口唇部下端に刻まれるもの、あるいは口縁直下に一条の沈線をめぐらすもの、また口縁から胴部上部にかけて肥厚させるもの等の特徴から、板付 II 式土器の前半期から後半期にかけてのものとおもわれる。県内の弥生前期遺跡は櫛遺跡（宮崎市）今別府遺跡（新富町）にみられるように、いずれも沖積地の砂丘列あるいは、砂丘に面した微高地に営まれていたと考えられるが、当遺跡の場合は、標高 50m の台地上にあって他の前期にあたる遺跡の立地と様相を異にしている。高鍋町内には他に中期の土器群を主体としながら前期末の下城式彫形土器を含む持田中尾遺跡があるが、これも小丸川左岸の持田台地につづく低丘陵上に位置していると ^{註4} いう本遺跡と似かよった立地条件のもとにある。

口縁部に擬凹線を施す高環形ミニチュア土器の出土はこれが初見である。県内における外来（瀬戸内系）の凹線文土器は高環形を主体として後期初頭から出現して、短期間（後期中葉）のうちに姿を消すが、その流入の時期が、^{註5} “花弁状住居址” の出現期と重複するなどそれまでとちがった変革期とみられる重要な時期にある。このミニチュア土器もまさにこの時期の所産と考えざるを得ないが、本遺跡出土遺物中に、このほかに弥生後期に比定すべきものをまったく検出し得ず、遺構や他の同時期にかかる遺物との比較対照をなし得るのがおしまれる。

以上、本遺跡は洪積台地終端となる斜面が南から迫り、平坦部も南北に幅の狭い段丘面となって、東西に細長い狭隘な立地条件であり、遺跡の中心部からずっと離れた“遺跡の周辺端部” にあたるものとおもわれることから、遺構・遺物の検出も少なかった。その中心はお

そらくなお東～南東方面に続いて広がるものと予想されるが、東側のそれは、昭和58～60年度工事の切削によってすでに失われている。

註1 ○面高哲郎『芳ヶ迫第1遺跡、県営農地開発事業前平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』田野町文化財調査報告書第1集 田野町教育委員会 1984

○面高哲郎・寺師雄二「芳ヶ迫第1・2・3遺跡、札ノ元遺跡」 県営農地開発事業前平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田野町文化財調査報告書第3集

田野町教育委員会 昭和61年

○岩永哲夫・菅付和樹「宮崎県内の集石遺構(1)」「九州考古学 第58号」

○谷口康浩・縄文時代「集石遺跡」に関する試論、「東京考古4.」 東京考古談話会 1986

註2 日高孝治「瀬戸口遺跡」新富町文化財調査報告書第4集 新富町教育委員会 1986
集石構成壁に円礎を主に用いるタイプが卓越する遺跡に、瀬戸口遺跡(新富町)がある。これは、当遺跡から南西10kmの一つ瀬川を眺む台地上に立地する。

註3 『木場A遺跡・九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』鹿児島県教育委員会 1982

註4 森 貞次郎『日本農耕文化の生成』日本考古学協会編 1972

註5 「新富町の埋蔵文化財」遺跡詳細分布調査報告書 新富町教育委員会 1982

註6 北郷泰道「持田中尾遺跡」発掘調査概要報告書 高鍋町教育委員会 1982年

註7 山中悦雄(現・石川)「宮崎平野における弥生土器編年試案」「宮崎県総合博物館研究紀要」(第八輯)昭和57年度

石川悦雄「日向における外來系土器の伝播とその地域性(1)～瀬戸内・幾内系土器の流入とその展開～」「宮崎県総合博物館研究紀要」(第九輯)昭和58年度
その他の参考文献

○『宮崎県文化財調査報告書』第24集 宮崎県教育委員会 1981年

○「辻遺跡」「清武工業団地造成工事埋蔵文化財発掘調査報告書」清武町土地開発公社
・清武町教育委員会 1980年

○「小山尻東遺跡」「田上遺跡」「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書」第3集
宮崎県教育委員会 1985年

- 「上ノ原遺跡」 川南町文化財調査報告書4. 1986年
- 「木佐貫原遺跡」「三代寺遺跡」(九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ)
『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(11)
鹿児島県教育委員会 1979年
- 「小山遺跡」「谷ノ口遺跡」(九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅺ)
『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(20)
鹿児島県教育委員会 1982年
- 「塞ノ神式土器」—地名表・拓影・論考編— 縄文研究会 1985年
- 「筑紫郡那珂川町大字中原所在深原遺跡の調査」「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」
第8集 福岡県教育委員会 1987年

観察表(1)

図面 番号	被物 番号	被物 番号	被物 番号	文様および調査		地 上	色 調		施成	調 査
				外 面	内 面		外 面	内 面		
21 A-1	深鉢	鉢部	椎円押型文	あらいナデ	きめの細かい、3.0mm以上の砂粒を多く含む み、黄灰、石英を含む。	底	に赤い色 感 (5.YR 4/6)	に赤い色 感 (5.YR 4/6)	やや底	
21 A-2	*	*	椎円押型文	あらいナデ	きめの細かい、3.0mm以上の砂粒を多く含む み、黄灰、石英を含む。	底	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	やや底	
21 A-3	*	*	山形押型文	ミガキ風	きめの細かい、3.0mm以上の砂粒を多く含む み、黄石、石英を含む。	底	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	に赤い色 感 (5.YR 4/6)	良好	
21 A-4	*	*	山形押型文	あらいナデ	きめの細かい、黄灰、石英を含み角閃石 をやや多く含む。	底	に赤い色 感 (5.YR 4/6)	に赤い色 感 (5.YR 4/6)	やや底	
21 A-5	*	脚部	椎円押型文	ヨコ方角あらいナデ (樹脂痕)	きめの細かい、黄灰、石英をやや多く含む	底	に赤い色 感 (5.YR 4/6)	に赤い色 感 (5.YR 4/6)	良好	
21 B-1	-	脚部	ナデ	ナデ	きめ細か、黄灰、黄石、角閃石を含む 角閃石をやや多く含む。	底	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	良好	
21 B-2	-	脚部	ナデ	ヨコ方角ナデ	きめ細か、黄灰、石英、角閃石を含む	底	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	良好	
21 B-3	-	脚部	あらいナデ (樹脂痕が残る)	黒化(ナデカ)	きめ細か、黄石、石英、角閃石を含む 内閃石は極端	底	に赤い色 感 (5.YR 4/6)	に赤い色 感 (5.YR 4/6)	やや軟	
22 1	深鉢	口縁	コヨナデ L脚部刻み	ナデ	きめ細か、1~3mm位の白い砂粒多く 含む、角閃石を含む。	底	に赤い色 感 (5.YR 4/6)	に赤い色 感 (5.YR 4/6)	良好	
22 2	*	*	コヨナデ L脚部刻み	ナデ	きめ細か、黄灰、石英、角閃石を含む 角閃石をやや多く含む。	底	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	やや底	
22 3	*	*	ナデ L脚部刻み、沈緑	ナデ	きめ細か、金属味を多く含む。0.5~1 mm位の白っぽい砂、黄灰、角閃石を含む	底	に赤い色 感 (7.YR 5/6)	に赤い色 感 (7.YR 5/6)	良好	
22 4	*	*	ナデ L脚部刻み、沈緑	ナデ	きめ細か、砂粒感、青閃石、石英、 角閃石を含む。	底	に赤い色 感 (10YR 4/6)	に赤い色 感 (10YR 4/6)	良好	穿孔あり
22 5	*	*	L脚部刻み、沈緑、粘赤	ナデ	きめやや粗い、0.5mm以下の白い砂粒の 砂粒を多く含む。内閃石は多く含む。	底	に赤い色 感 (10YR 4/6)	に赤い色 感 (10YR 5/6)	良好	
22 6	*	*	口縫部刻み、沈緑	ナデ	きめ細か、白い砂粒、黄灰、角閃石を 含む。全表面は白んでる。	底	に赤い色 感 (10YR 4/6)	に赤い色 感 (10YR 4/6)	良好	
22 7	*	*	口縫部刻み、沈緑	ナデ	きめ細か、角閃石を含む	底	に赤い色 感 (10YR 4/6)	に赤い色 感 (10YR 5/6)	良好	
22 8	*	*	ナデ 口縫部刻み	ナデ	きめ細か、黄灰、角閃石を含む	底	に赤い色 感 (10YR 4/6)	に赤い色 感 (10YR 4/6)	良好	
22 9	*	*	L脚部刻み、沈緑	ナデ 口縫部刻み	きめ細か、石英、角閃石を含む。 1~1.5mm位の白、茶の砂粒を含む。	底	に赤い色 感 (5.YR 4/6)	に赤い色 感 (5.YR 4/6)	良好	
22 10	*	*	ナデ 口縫部刻み、沈緑	ナデ	きめ細か、1~2mmの基の砂粒、石 英、角閃石を含む。	底	に赤い色 感 (10YR 4/6)	に赤い色 感 (10YR 4/6)	良好	
22 11	*	*	ナデ 口縫部刻み、沈緑	ナデ 口縫部刻み	きめ細か、0.5mm位の白い砂粒、西 内閃石を含む	底	に赤い色 感 (10YR 4/6)	に赤い色 感 (10YR 5/6)	良好	
22 12	*	*	ナデ 口縫部刻み、沈緑、粘赤	コヨナデ 口縫部刻み	きめ細か、石英、角閃石を少し含む 白の砂粒を多く含む。	底	に赤い色 感 (10YR 4/6)	に赤い色 感 (10YR 5/6)	良好	
22 13	*	*	ナデ 口縫部刻み、沈緑、粘赤	ナデ	きめ細か、角閃石を多く含む。 白の砂粒を多く含む。	底	に赤い色 感 (10YR 4/6)	に赤い色 感 (10YR 5/6)	良好	穿孔あり
22 14	*	*	ナデ 口縫部刻み、沈緑	ナデ	きめ細か、黄灰、角閃石を含む	底	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	良好	
22 15	*	*	ナデ 口縫部刻み、沈緑	ナデ	きめ細か、黄灰、角閃石を含む	底	に赤い色 感 (10YR 4/6)	に赤い色 感 (10YR 4/6)	良好	
22 16	*	*	ナデ 口縫部刻み、沈緑	ナデ	きめ細か、石英、角閃石を含む	うすい層	明 赤 黄	明 赤 黄	良好	
22 17	*	口縫 付近	ナデ 沈緑、黒赤、墨入り	ナデ	きめやや粗い、0.5mm以下の白い砂粒の 砂粒を多く含む。角閃石を多く含む。	底	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	に赤い色 感 (10YR 4/6), (10YR 5/6)	良好	
22 18	*	口縫 付近	ナデ 沈緑	コヨナデ	きめ細か、白、茶の砂粒、2mmの 砂粒を含む。角閃石を多く含む。	底	に赤い色 感 (5.YR 4/6)	に赤い色 感 (5.YR 4/6)	良好	
22 19	*	口縫	口縫部刻み、沈緑、 粘赤、墨入り	ナデ	きめ細か、白、茶の砂粒、石英、角閃 石を含む。	底	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	良好	
22 20	*	*	L脚部刻み、沈緑 粘赤部刻み	丁寧ナデ	きめ細か、0.20~0.25mmの黄灰、黄 色、角閃石を多く含む。	底	に赤い色 感 (5.YR 4/6)	に赤い色 感 (5.YR 4/6)	良好	
22 21	*	*	口縫部刻み、沈緑 粘赤部刻み	ナデ	きめ細か、0.05~0.08mm、微細な 砂粒を多く含む。石英、石英、砂粒を 多く含む。石英、石英、砂粒を多く含む。	底	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	良好	
22 22	*	*	口縫部刻み、沈緑 粘赤部刻み	ナデ	きめ細か、砂粒感、石英、角閃石を 含む。	底	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	良好	口縫部、粘赤 のこより
22 23	*	口縫 付近	沈緑、黒赤部刻み	ナデ	きめ細か、白、黒の砂粒、石英、角 閃石を含む。	底	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	に赤い色 感 (10YR 4/6)	良好	
22 24	*	*	沈緑、黒赤部刻み	ナデ	きめ細か、0.5~4mmの白、茶の砂粒を 含む。角閃石、石英、黄灰、角閃石を 含む。	底	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	良好	
22 25	*	*	沈緑、黒赤	ナデ	きめ細か、砂粒感、細かい角閃石を 含む。	底	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	良好	
22 26	*	口縫	沈緑、黒赤 粘赤部刻み	ナデ	きめ細か、黄灰、石英、角閃石を含む	底	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	良好	
22 27	*	*	口縫部刻み、沈緑	コヨナデ	きめ細か、白、黒、茶の砂粒感、 石英、角閃石を含む。	底	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	良好	内面に黒点あり
22 28	*	*	口縫部刻み、沈緑	ナデ	きめ細か、石英を多く含む。2mm以下 の白、灰、茶の砂粒を多く含む。	底	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	良好	
22 29	*	*	沈緑、黒赤	ナデ	きめ細か、石英を多く含む。2mm以下 の白、灰、茶の砂粒を多く含む。	底	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	良好	
22 30	*	*	ナデ 沈緑、黒赤	ヨコナデ(横) ヨコナデ(横)のこ	きめやや粗い、砂粒、石英、角閃石、 黄灰、角閃石を含む。	底	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	に赤い色 感 (10YR 4/6)	良好	調査孔あり
22 31	*	*	ナデ 沈緑、黒赤 粘赤部刻み	ナデ	きめ細か、白、茶の砂粒、石英、角 閃石を含む。	底	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	良好	
22 32	*	*	沈緑、黒赤	ナデ	きめ細か、白、茶の砂粒、石英、角 閃石を含む。	底	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	に赤い色 感 (7.YR 4/6)	良好	
22 33	*	*	沈緑、黒赤	ケズリ	きめ細か、石英、角閃石を多く含む。1mm~ 2mm以下の白、灰、茶の砂粒を含む。	底	に赤い色 感 (10YR 4/6)	に赤い色 感 (10YR 4/6)	良好	
22 34	*	*	ナデ 沈緑、黒赤	ナデ	きめ細か、石英、角閃石を多く含む。1mm~ 2mm以下の白、灰、茶の砂粒を含む。	底	に赤い色 感 (10YR 4/6)	に赤い色 感 (10YR 4/6)	良好	

観察表(2)

回数	植物名	形態	部	文様および調整		基土	色調		達成	備考	
				外面			外面	内面			
				外	面		内	外			
23	34	根被	脚部	ナ	デ	きの細か、石高、角閃石を含む、1mm以下の中、角閃石の粒径を含む	透	黄 (2.5Y 7/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
23	35	*	脚部	ナ	デ	きの細か、角閃石、金雲母を含む、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 4/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
23	36	*	脚部	ナ	デ	きの細か、石高、角閃石を含むが、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 7/4)	に い 黄 (2.5Y 7/4)	良好	
23	37	*	脚部	ナ	デ	きの細か、角閃石を含むが、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 4/4)	に い 黄 (2.5Y 7/4)	やや軟	
24	38	*	脚部	ナ	デ	きの細か、石高、角閃石を含むが、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	小品	
24	39	*	脚部	ナ	デ	きの細か、2mm以下の白、灰、灰岩等の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 7/4)	に い 黄 (2.5Y 7/4)	良好	
24	40	*	脚部	ナ	デ	きの細か、2mm以下の白、灰、灰岩等の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 7/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
24	41	*	脚部	ナ	デ	きの細か、石高、角閃石を含むが、0.5mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 5/2)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
24	42	*	脚部	ナ	デ	きの細か、白、灰、石高、角閃石を多く含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
24	43	*	脚部	ナ	デ	きの細か、角閃石、角閃石を多く含む、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 4/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
24	44	*	脚部	ナ	デ	きの細か、石高、角閃石を含む	透	黄 (2.5Y 7/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
24	45	*	脚部	ナ	デ	きの細か、角閃石、石高を少し含む、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 4/4)	良好	
24	46	*	脚部	ナ	デ	きの細か、白、灰、石高、角閃石を多く含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
24	47	*	脚部	ナ	デ	きの細か、角閃石、石高を多く含む、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
24	48	*	脚部	ナ	デ	きの細か、石高、角閃石を含む	透	黄 (2.5Y 7/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
24	49	*	脚部	ナ	デ	きの細か、石高、金雲母を含む、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
24	50	*	脚部	ナ	デ	きの細か、石高を多く含む、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
24	51	*	脚部	ナ	デ	きの細か、白、灰、角閃石を多く含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
24	52	*	脚部	ナ	デ	きの細か、白、灰、角閃石を多く含む	透	黄 (2.5Y 7/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
24	53	*	脚部	ナ	デ	きの細か、石高、角閃石を含む、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
24	54	*	脚部	ナ	デ	きの細か、石高、角閃石を含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
24	55	*	脚部	ナ	デ	きの細か、白、灰、金雲母を含む、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
24	56	*	脚部	ナ	デ	きの細か、石高、角閃石を含む、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
24	57	*	脚部	ナ	デ	きの細か、石高、角閃石を含む、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
25	58	*	脚部	ナ	デ	きの細か、角閃石、石高を含む、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
25	59	*	脚部	ナ	デ	きの細か、角閃石、石高を含む、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
25	60	*	脚部	ナ	デ	きの細か、石高、角閃石を含むが、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
25	61	*	脚部	ナ	デ	きの細か、内閃石、玉髄を少し含む、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 7/4)	に い 黄 (2.5Y 7/4)	良好	
25	62	*	脚部	ナ	デ	きの細か、内閃石、玉髄を少し含む、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 7/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
25	63	*	脚部	ナ	デ	きの細か、白、灰、角閃石を多く含む、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
25	64	*	脚部	ナ	デ	きの細か、白、灰、角閃石を多く含む、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
25	65	*	脚部	ナ	デ	きの細か、白、灰、角閃石を多く含む、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
25	66	*	脚部	ナ	デ	きの細か、角閃石、玉髄を少し含む、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 7/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
25	67	*	脚部	ナ	デ	きの細か、角閃石を少し含む、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
25	68	*	脚部	ナ	デ	きの細か、石高、角閃石を含む	透	黄 (2.5Y 6/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
25	69	*	脚部	ナ	デ	きの細か、石高、角閃石を含む、1mm以下の白、灰、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 7/2)	に い 黄 (2.5Y 6/2)	軽くて緑の半分である 緑赤茶文である	
25	70	*	脚部	ナ	デ	きの細か、石高、石高、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 7/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	やや軟	
25	71	*	脚部	ナ	デ	きの細か、石高、石高、砂鉄0.5~1mm大さじ	透	黄 (2.5Y 7/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	良好	
25	72	*	脚部	ナ	デ	きの細か、白、石高、石高、砂鉄0.5~1.5mm大さじ	透	黄 (2.5Y 7/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	やや軟	
25	73	*	脚部	ナ	デ	きの細か、白、石高、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 7/4)	に い 黄 (2.5Y 6/4)	やや軟	
25	74	*	脚部	ナ	デ	きの細か、石高、石高、角閃石の粒径を多く含む	透	黄 (2.5Y 7/4)	に い 黄 (2.5Y 7/4)	やや軟	

図 版



* 発掘前の状況



旧石器面発掘区（東→西）



水谷原遺跡から町並を眺む



発掘区（西→東）



発掘調査状況



南側斜面の発掘区

図版2



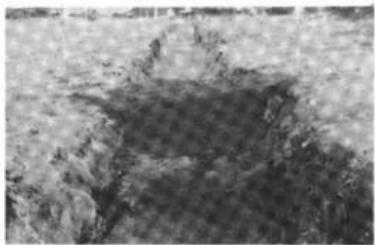
赤ホヤ上層で検出した溝状遺構



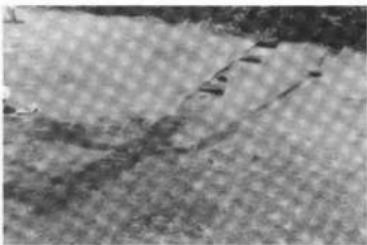
縄文早期面発掘区（東→西）



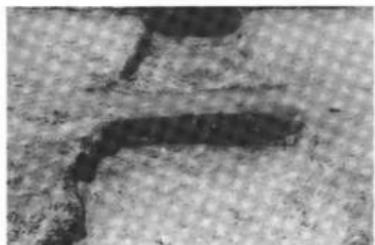
溝状遺構
精査状況



溝状遺構断面



溝状遺構

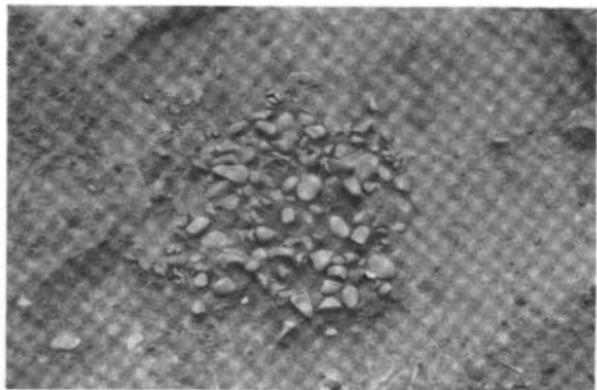


溝状遺構断面



溝状遺構断面

図版 4



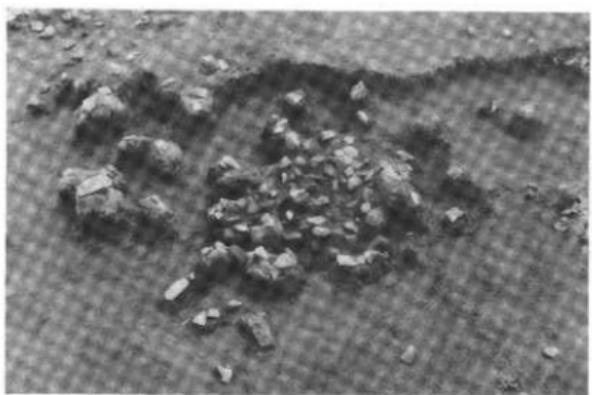
1号集石遺構（円礫が集石されたもの）



1号集石遺構断面



2号集石遺構

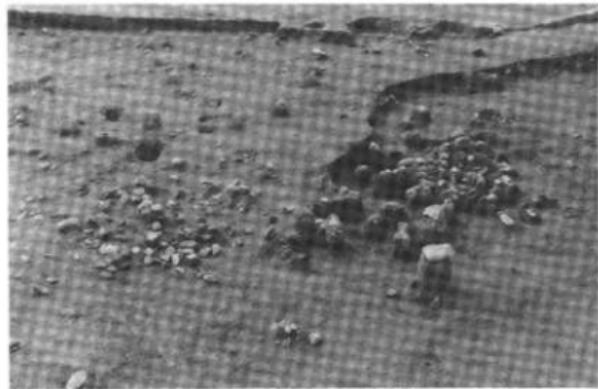


2号集石遺構

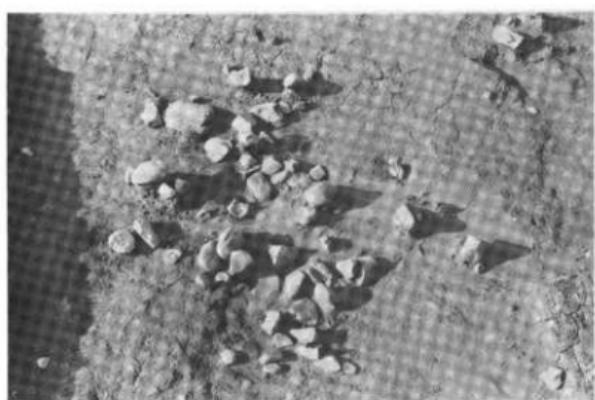
図版 6



2号・3号集石遺構と4号土壤



3号集石遺構・2号集石遺構

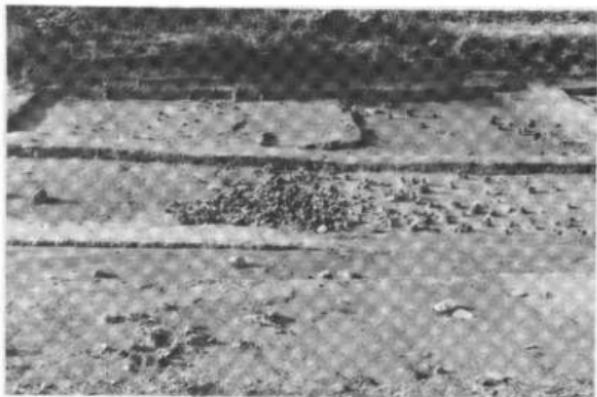


4号集石遺構



5号集石遺構と上部土層

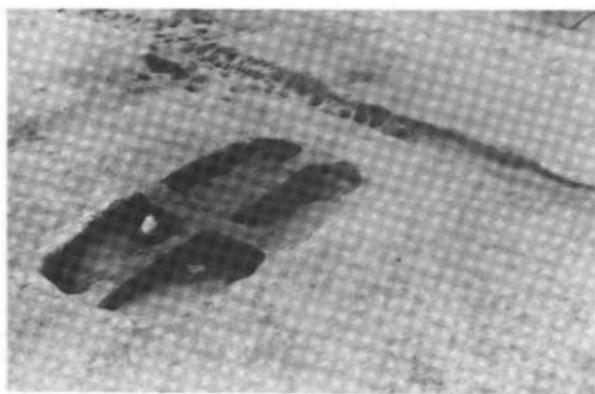
図版 8



6 号 集 石 遺 稿



6 号 集 石 遺 構 断 面

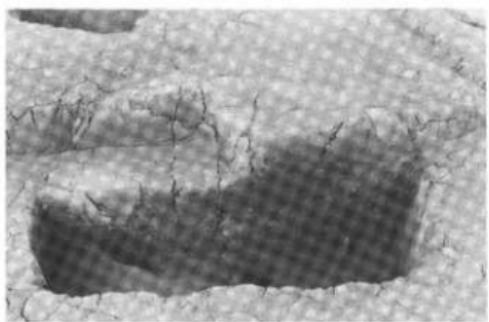


3 号 土 壤

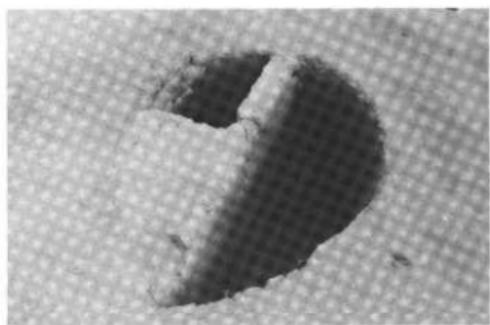


1 号・2 号 土 壤

図版10



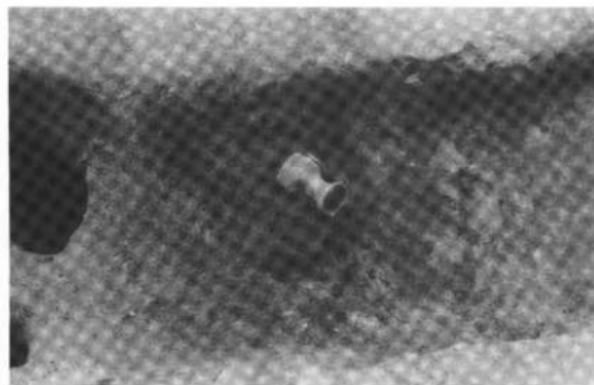
5号土壤断面



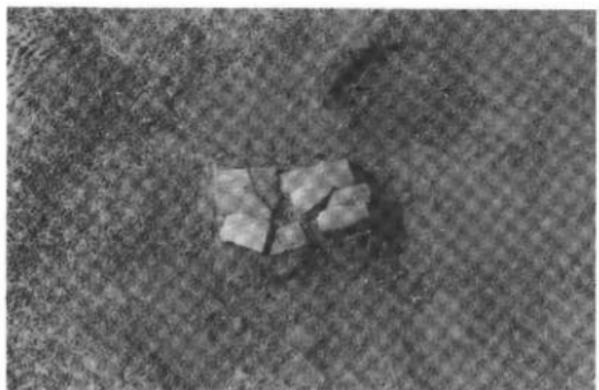
4号土壤



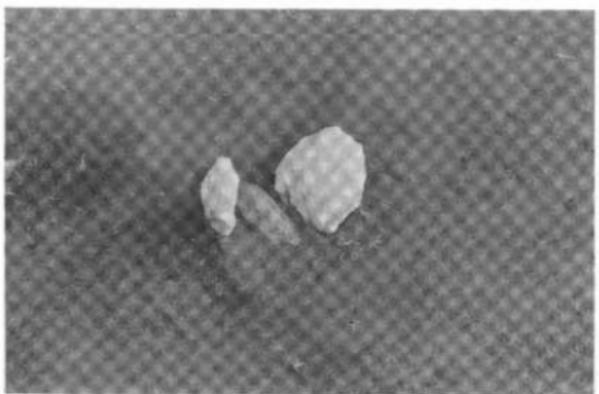
ミニチュア高環形土器出土状況



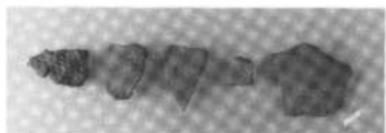
ミニチュア高環形土器出土状況



IV類土器出土状況



円盤状石器出土状況



押型文土器 A-1・2・3・4・5

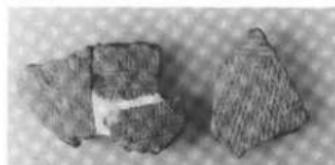


20

21



口縁部 3・4・5・6, 7・8・9・10・11



28

29



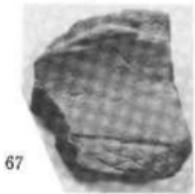
32



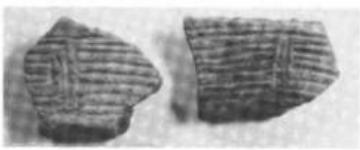
口縁部 21・22・23・24, 25・26・27



30 31



67



底部 73

74

繩文土器 1



1・33・34・35
36・41・42・37



60・61・59
58・59・56・55



50・47・52・64
62・63・53・54

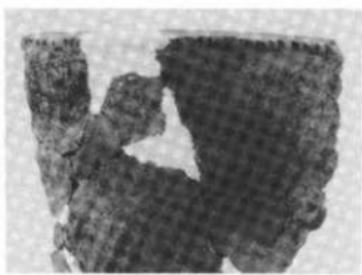


39・40・43・44
45・48・49

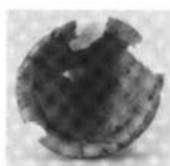
縄文土器 2



13図-1



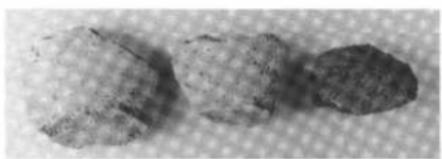
同 左



13- 2 · 3 · 4 · 5 , 6 · 8



四線文ミニチュア高環



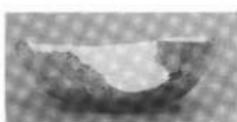
13- 9 · 10 · 11



土 錘 · 石 錘



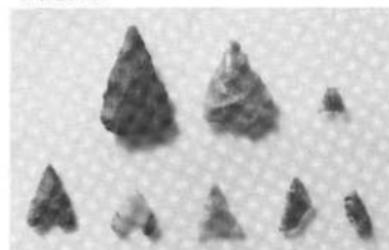
14- 3



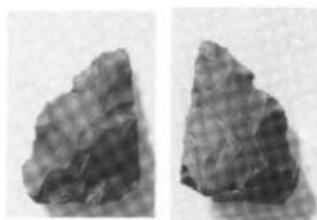
14- 4

弥生土器 · 壺 · 土錘 · 石錘

図版16



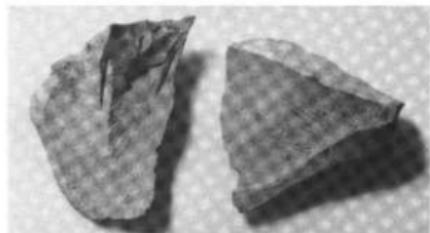
石鏃 27-7・5・8, 4・3・1・2・6



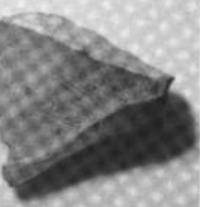
28-A-1



綫長剣片 A-2・A-3



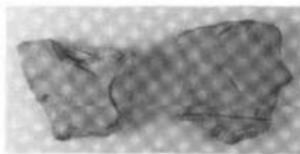
C-2



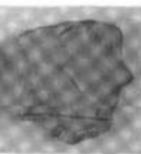
D-1



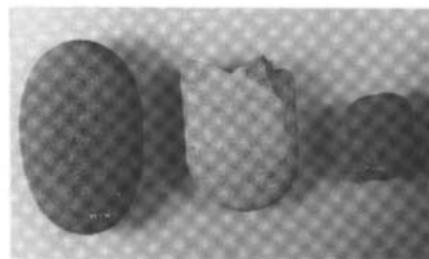
円盤状石器 F-1・F-2



B-1

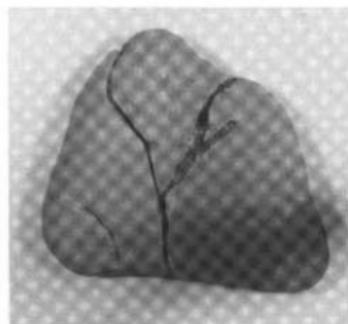


B-2



E-3

E-1



石皿 G

出土石器

水谷原遺跡発掘調査報告書

発行年月日 昭和63年3月

編集発行 宮崎県教育委員会